

平成11年度
帰国研修員フォローアップチーム報告書

(公開技術セミナー)

— テレビジョン番組制作 —
— テレビジョン社会教育番組II —

平成11年6月

JICA LIBRARY



J1153538(2)

国際協力事業団
東京国際研修センター

120
79.6
TJH
LIBRARY

東国セ
JR
99-301

平成11年度
帰国研修員フォローアップチーム報告書

(公開技術セミナー)

- ー テレビジョン番組制作 ー
- ー テレビジョン社会教育番組II ー

平成11年6月

国際協力事業団
東京国際研修センター



1153538(2)

序 文

本報告書は、国際協力事業団が実施している集団研修コース「テレビジョン番組制作」及び「テレビジョン社会教育番組II」に参加した帰国研修員に対するアフターケア事業の一環としてフォローアップ調査団を平成11年5月24日から6月4日まで、スリ・ランカ、パキスタンの2カ国に派遣し、研修員所属機関、各関係機関への訪問並びに帰国研修員との面談を通じ、また現地で開催した公開セミナーにおいて、研修効果の確認、評価、今後のニーズ調査の結果をとりまとめたものです。

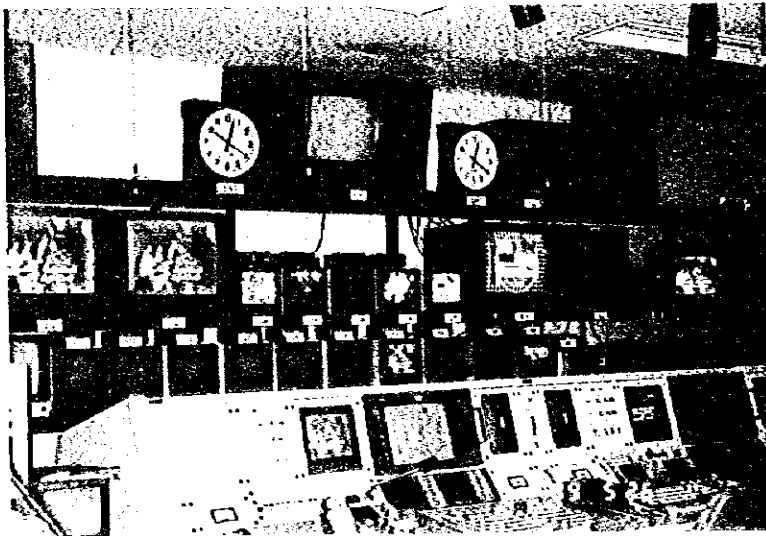
本書により当該分野における各国の実状、帰国研修員の活動状況及び研修に係る要望について、関係各位より深いご理解を頂き、同時に今後のよりよい研修コースの実施、運営の参考になれば幸甚と存じます。

なお、本フォローアップ調査の実施にあたり、多大な協力を賜った外務省、郵政省及び現地において数々のご指導とご協力を賜った在外公館、JICA派遣専門家ならびに関係機関各位に対し、心からお礼を申し上げます。

平成11年6月

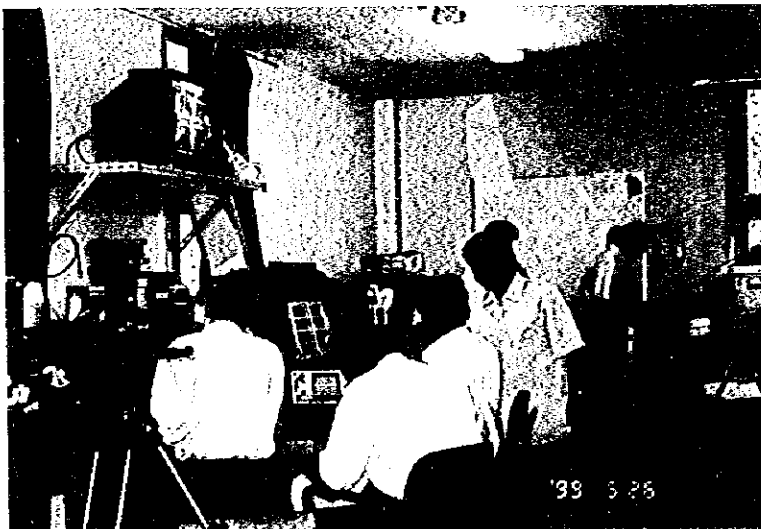
国際協力事業団
東京国際研修センター
所長 橋本明彦

〈スリ・ランカ〉



ルバビヒニテレビ局 (SLRC)
視察
(コントロールルーム)

(スタジオ)



(資機材メンテナンス室)

公開技術セミナー開催



公開技術セミナー開催



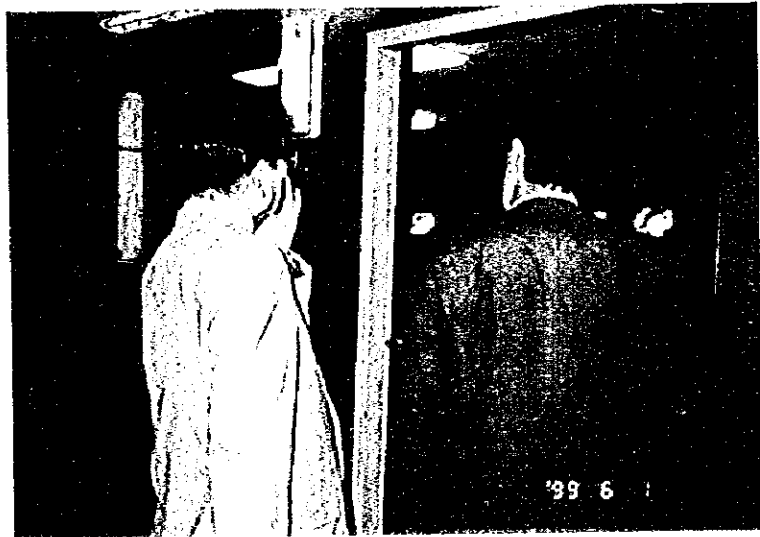
帰国研修員との面談

〈パキスタン〉

情報放送省表敬



パキスタンテレビ局 (PTV)
視察

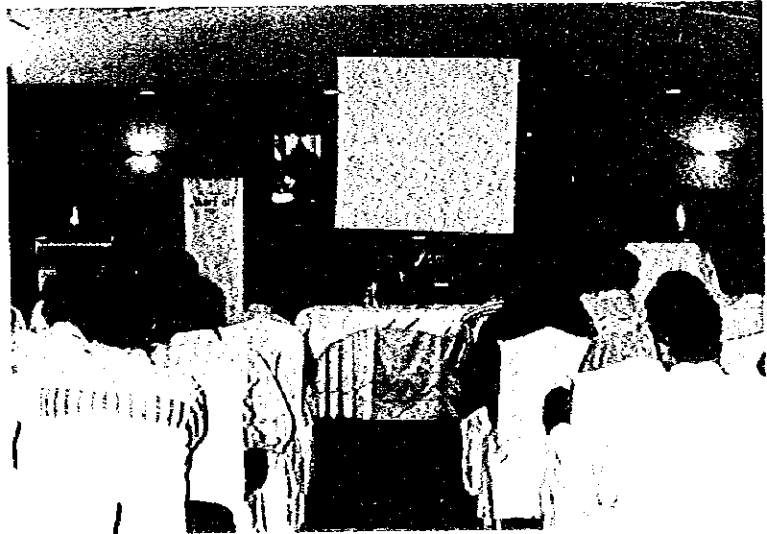


教育テレビ局 (PTV2) 視察



アラマイクバル公開大学視察

公開技術セミナー開催



公開技術セミナー開催

目 次

序文	
写真	
第1章 調査実施概要	
1. 派遣目的	… 1
2. 分野・対象コース	… 1
3. 派遣国・派遣期間	… 1
4. 団員構成	… 1
5. 調査方法	… 1
6. 調査日程	… 2
第2章 調査内容及び結果	
<スリ・ランカ>	
1. スリ・ランカの当該分野の概況、課題、今後の方向	… 3
2. 各関係機関の現状、問題点・改善点及び日本に対するニーズ (スリ・ランカノルパバヒニテレビ局、テレビ研修所、公開大学、エカラ短波送信所)	… 5
3. 帰国研修員の研修評価、習得技術の活用・普及効果及び今後の研修への期待	… 7
<パキスタン>	
1. パキスタンの当該分野の概況、課題、今後の方向	… 9
2. 各関係機関の現状、問題点・改善点及び日本に対するニーズ (パキスタンテレビ局、教育テレビ局、PTVアカデミー、アラマイクバル公開大学)	… 11
3. 帰国研修員の研修評価、習得技術の活用・普及効果及び今後の研修への期待	… 13
第3章 公開技術セミナー実施報告	
1. 実施概要	… 15
2. 実施内容	
(1) 講義「日本の放送事業-現状と今後の動向」	… 19
(2) 講義「NHKの番組制作-最新技術の紹介」	… 20
(3) 講義「番組制作の基本」	… 21
(4) 帰国研修員による番組発表及びアドバイス	… 23
(5) JICA専門家による講評 - 要約 - (スリ・ランカのみ)	… 25
3. アンケート集計	… 26
第4章 総括所見及び今後の研修コースへの提言	
1. 本調査を通しての総括所見	… 32
2. 今後の研修コースへの具体的提言	… 33
添付資料	
1. コース概要	… 37
2. 帰国研修員リスト (定着状況)	… 41
3. 主要面談者リスト	… 43
4. クエスチョネア	… 45
(技協窓口省庁／関係省庁)	
(研修員所属機関)	
(帰国研修員 - 集計 -)	

第1章 調査実施概要

1. 派遣目的

本チームは、国際協力事業団が技術協力の一つとしている研修員受入事業のアフターケアの一環として派遣するものであり、以下を主たる目的とする。

具体的な派遣目的は次のとおりである。

- (1) 帰国研修員、同研修員所属先並びに関連機関等を訪問し技術的問題に対し助言すること。
- (2) 現地でのセミナー開催等を通じ、当該分野における最新の技術情報を広く関係者等に提供すること。
- (3) 我が国で実施した研修の成果が現地においていかに活用され、どのような（波及）効果をもたらしているかを調査すること。
- (4) 対象国における当該分野の技術水準、その向上を妨げている要因及び今後の研修ニーズを、付帯分野・周辺分野を含めて広く調査・把握すること。
- (5) (3)、(4)の調査結果を分析し、当該研修コース改善・当該分野関連研修、新規コースの開発に対する具体的な提言をまとめること。

2. 分野・対象コース

調査分野：テレビ番組制作

対象コース：テレビジョン番組制作、テレビジョン社会教育番組II

(添付資料1.「コース概要」参照)

3. 派遣国・派遣期間

派遣国：スリ・ランカ、パキスタン

派遣期間：平成11年5月24日から6月4日までの12日間

4. 団員構成

(1) 総括／放送行政

郵政省 国際部国際政策課 調査官

大塚 隆史 氏

(2) 番組制作（技術）

日本放送協会 国際放送局国際企画部 副部長

加藤 正憲 氏

(3) 番組制作（プロデューサー）

(財)NHK放送研修センター チーフディレクター

南 喜久 氏

(4) 企画調整

国際協力事業団 東京国際研修センター

樋田 奈々美

5. 調査方法

事前調査・現地調査双方において可能な限り広範な資料の収集・整理・分析を行なうと共に、帰国研修員、同所属先機関、関係機関への面談、質問表（クエスチオネア）の送付・回収及び関係施設視察により調査を実施した。

6. 調査日程

No.	日 時		行 程	宿泊地
	日	時		
1	5月24日	(月) 11:00	成田発→15:15バンコク乗継ぎ18:25→20:35コロンボ着 (JL717) (CX701)	スリ・ランカ コロンボ泊
2	5月25日	(火) 9:00 11:00 11:50 15:00 16:30	JICAスリ・ランカ事務所表敬及び打ち合わせ 在スリ・ランカ日本大使館表敬 スリ・ランカ大蔵・企画省表敬 スリ・ランカノルババヒニテレビ局 (SLRC)表敬 スリ・ランカ郵便・通信・メディア省表敬	
3	5月26日	(水) 9:30 11:30 14:00 16:30	スリ・ランカノルババヒニテレビ局 (SLRC)視察 スリ・ランカテレビ研修所 (SLTH)視察 スリ・ランカ公開大学視察 エカラ短波送信所視察	
4	5月27日	(木) 9:30 16:00 19:00	公開技術セミナー開催 帰国研修員面談 団長主催夕食会	
5	5月28日	(金) 9:30 12:00	報告内容とりまとめ JICAスリ・ランカ事務所への報告	
6	5月29日	(土)	資料整理	
7	5月30日	(日) 10:00	コロンボ発→12:40カラチ乗継ぎ16:00→17:55イスラバート着 (UL183) (PK306)	パキスタン イスラバート泊
8	5月31日	(月) 9:00 10:00 11:00 15:30	JICAパキスタン事務所表敬及び打ち合わせ パキスタン財政・経済省表敬 パキスタン情報・放送省表敬 在パキスタン日本大使館表敬	
9	6月1日	(火) 9:30 10:30 11:30 14:30	パキスタン教育テレビ局 (PTV2) 視察 PTVアカデミー視察 アラマイクバル 公開大学視察 パキスタンテレビ局 (PTV) 視察	
10	6月2日	(水) 9:30 16:30	公開技術セミナー開催 帰国研修員面談	
11	6月3日	(木) 9:00 22:35	JICAパキスタン事務所への報告 イスラマバード発→ (PK880)	
12	6月4日	(金) 12:40	成田着	

第2章 調査内容及び結果

<スリ・ランカ>

1. スリ・ランカの当該分野の概況、課題及び今後の方向

(1) 概況

ア. テレビジョン放送

a. 所管庁

放送局の監督は郵便・通信・メディア省が所管し、放送局の免許、番組の規律などを行っている。

b. 受信機の普及

受信機の普及台数は1995年時点で120万台(100人あたり6.6台)程度となっている。

c. 事業体

スリ・ランカのテレビジョン放送は公共放送であるスリ・ランカ/ルババビニテレビ局(SLRC)の2チャンネル及びインデペンデントテレビジョンネットワーク(ITN)の1チャンネル並びに民間放送の6チャンネルからなる。SLRCの放送は一部の難視聴地域を除きほぼ全国をカバーしているが、その他はコロombo他人口が多い都市部のみをカバーしている。また、SLRC及びITNは自主制作番組の比率が高いが、民間放送はほとんどの番組が衛星で受信した海外のものである。

スリ・ランカにおける最初のテレビジョン放送であるSLRCの第1チャンネルは、1979年及び1980年にそれぞれ実施された我が国の無償資金協力「テレビジョン放送局建設計画」及び「全国テレビジョン放送網整備計画」により1979年に開始された。以降、1984年の無償資金協力「テレビジョン放送拡充計画」により放送設備の拡充を行い、1997年の「ルババビニ放送局改善計画」で番組制作設備を更改している。

第2チャンネルは1999年に放送を開始した教育番組で、構成は海外から購入した番組及びスポーツ中継が中心となっている。

SLRCの収入源は受信料及び広告収入で、年間収入は約7億ルピー(約14億円)である。内訳は受信料収入20%、広告収入80%である。受信料の収納率は40%程度となっている。

d. テレビジョン放送分野での日本の協力

テレビジョン放送分野においては上記cの無償資金協力の他、研修員受入及び専門家の派遣により協力を行っている。1998年度までの実績は、研修員受入延べ117名、専門家派遣延べ94名となっている。本件調査の対象である番組制作2コースについては計10名(1991年以降)を受入れている。また、SLRCに対しては開局以来現在まで一貫して長期専門家を派遣してきている。

イ. その他の番組制作関連分野

放送以外の分野では公開大学での教材用の番組制作がある。同大学の番組制作施設は 1991 年及び 1992 年に実施された無償資金協力「公開大学整備計画(I)及び(II)」により整備された。

文部省管轄のスリ・ランカテレビ研修所(SLTTR)では番組制作技術を含めた研修コースを有しており、SLRC が実施する第三国研修のための会場ともなっている。また、大蔵・企画省には広報番組制作等のための組織があり、番組制作設備を有している。

この他、放送局からの委託により番組を制作する民間のプロダクションが存在する。

(2) 課題

スリ・ランカにおけるテレビジョン放送は、上記のごとく公共放送 2 社、民間放送 6 社からなるが、SLRC 以外はサービスエリア、番組制作の面でなお不十分であり、テレビジョン放送の今後の発展については公共放送として SLRC が最大の役割を担っている。SLRC は数次にわたる我が国の無償資金協力により設備面ではかなり充実したものとなっているが、番組制作分野ではなお課題を有している。

放送開始以来 20 年を経過し、SLRC の第 1 チャンネルでは独自に制作した番組をかなりの割合で放送しているが、番組の質（内容及び制作技術）の向上がなお課題といえる。また、SLRC の第 2 チャンネルは独自制作の番組の割合が低く、ほとんどの時間海外から購入した番組を放送している。しかし、国民のニーズに応じた良質な番組を提供する責務を負う公共放送としては本来の姿ではなく、独自の教育番組を増やすなど今後改善が必要である。

(3) 今後の方向

スリ・ランカでは長期にわたる民族紛争から近年の経済成長は近隣の ASEAN 諸国に比べ大きく遅れを取っており、テレビジョン受信機の普及台数も 100 人当たり 6.6 台となお低い。公共放送、民間放送及びその他の番組制作分野を含めた全体の発展の為には基本的に経済の底上げが必要である。

このような中で SLRC は第 2 チャンネルの開始及び難視聴解消用の中継局の設置を自力で行うなど、将来へ向けて放送サービスの充実に強い意欲を有している。しかし、上記のとおりなお課題を有しており、これらの課題を克服し、テレビジョン放送の発展に寄与していくためには、引き続き人材の育成と資金の確保が必要である。

2. 各関係機関の現状、問題点・改善点および日本に対するニーズ

(1) スリ・ランカ／ルパバビニテレビ局 (SLRC)

ア. 現状

NHKから永年に渡り長期専門家派遣をしてきた事もあり、日本の放送技術に対する信頼感は非常に高い。SLRC自身も日本での研修の成果を高く評価している。スリ・ランカ国内に大きな民放がないこともあり、帰国研修員の9割が定着している。現在派遣中の長期専門家によると、日本での研修修了者は確実に実力が伸びているとの事である。

SLRCでは帰国研修員が報告会を開催したり、重要番組に投入されること等により研修で得た知識を共有し、全体のレベルアップを図ることに務めているとの事であった。

特に、番組制作におけるシステムティックなプランニング手法（企画立案から台本作成、事前打ち合わせを経て番組収録に至るまで）を実際に活用しているようで、研修の効果が広がっている印象を受けた。

また、無償供与された放送機材を大切に使用しており、更新後の旧機材も自ら流用を計画するなど、技術の要であるメンテナンス・設備整備計画等も一定のレベルに達しているようで、日本での技術分野の研修についても成果が上がっている印象を受けた。

イ. 問題点・改善点

日本での研修終了者以外の職員については、新人を含め、SLRC内での研修制度がなく、系統だった知識のないままに実務についているのが現状であり、本研修の成果を効果的に利用した社内研修制度の確立が必要である。

番組制作については、次の番組のための提案会議、個々の番組を互いに評価しあう視聴検討会などの制度がなく、プロデューサー・ディレクター同志がお互いに切磋琢磨する機会を構築できていない。

長期専門家の常日頃からのアドバイスを期待できる恵まれた環境にあるが、今後如何に自立的に業務を行えるかが課題である。

ウ. 日本に対するニーズ

a. 新たな研修コースの新設を希望

- 最新の番組制作技術、コンピュータグラフィックスを活用した高度な画面制作
- 年齢・学年別の子供向け番組制作
- エンターテイメント番組制作（歌、ドラマ等）
- 自然ものドキュメンタリー番組制作のための最新技術

b. 研修員の受入枠の拡大

c. 短期専門家による研修終了者のフォローアップ、リフレッシュ研修の実施

等が上げられた。

(2) スリ・ランカテレビ研修所 (SLTTI)

ア. 現状

SLRC局長が所長を兼務し、意欲的に取り組んでいる印象である。旧機材を有効に活用している。

10名、2～3週間程度の放送関連の有料研修を、年間17コース（1999年）実施するスケジュールである。スリ・ランカばかりでなく近隣諸国からの研修生を受け入れたい希望であるが、現時点では国内研修生に限られている。

イ. 問題点・改善点

SLRCの第三国研修の会場としても機能しているが、前述のようにSLRCの社内研修機関として活用するに至っていない。

(3) 公開大学

番組制作設備は、日本の無償資金協力によって充実した機材が整備されており、NHKのOBが長期専門家として計4年半派遣されていた。

成人教育用のビデオ教材等を制作しているが、テレビ放送はされていない。設備の有効活用については、今後を注目する必要がある。

(4) エカラ短波送信所

日本の援助で1991年に整備された。南西アジア向けにラジオ日本を再送信する短波送信機を有している。

一昨年、予備パーツの定期補充を怠り長時間の送信停止に陥ったことがあるが、現在は補充も完了し、適正に運営されている印象を受けた。

3. 帰国研修員の研修評価、習得技術の活用・普及効果 及び今後の研修への期待

帰国研修員10名（番組制作5名、社会教育番組5名、このうち公開技術セミナー参加者8名、また、10名の内9名がSLRCの職員）の面談とクエスチョネアを総括すると以下のとおりである。

(1) 研修評価

日本での研修への評価は極めて高く、全ての帰国研修員が研修の目指した目標と目的に満足を感じ、研修の3本柱である講義、番組制作実習、それに見学それぞれに皆満足してくれていた。

研修の目標・目的を変えるべきとか不平をいう人は皆無だった。

(2) 習得技術の活用・普及効果

本研修では実習を通して、質の高い番組制作の方法の会得を大きな目標のひとつにしており、企画のたて方や取材、構成、編集、コメントの書き方などの基本実習の中からさらに高いジャーナリスト精神の会得も目指している。

ア. 本研修で最も有益だったもの

スクリプト（コメント）の書き方（4名）、編集の方法（4名）、さらに番組の企画の立て方や“シーン・カード”で構成・編集を練り直す方法など、ほとんどが実習で学んだものをあげている。計画通りに仕事をする方法を学んだという人もいた。

イ. 帰国後、研修で得たものの自分の仕事・組織への活用

「番組の構成を途中で変えながら最終的に質の良い番組を作るというのは初めての経験で、帰国後そのテクニックを使ったら大変良い結果を得ている。」という声に代表されるように、全員がそれぞれの方法で、研修で得た知識・技能を番組の企画、構成、編集、スクリプト作成などに活用していた。

これらなかで最も注目されるのが、“シーン・カード”と“ショットリスト表”を組織として活用する動きである。

“シーン・カード”は構成作業の時に使うもので、一枚のカードに一つシーンのタイトルを書いて壁に貼り、書き上げた沢山のカードを何回も入れ替え作業を行うことによって、番組の内容を練り上げていくものであり、“ショットリスト表”は編集の終わった総てのショットとその時間を書き出した表で、これを使うことにより、映像と音とコメントの相乗効果を考えることが出来るという、いずれも番組の質を高めるためには欠かせないものである。

もう一つ注目されることはスリランカでは比較的人事がうまくいっているのではないかということである。日本での研修には若い人たちが参加し、多くを吸収していく。

また、若い人が入るから先輩の帰国研修員は要職につきやすい関係にある。こうして要職についた帰国研修員が「研修の成果を部下の指導に活用している」、「部下にアドバイスしている」というふうにより研修成果の伝達もうまく行き、番組制作集団らしい雰囲気になりつつあると見受けられた。

ウ. 活用に当たっての問題点

「SLRCの上層部の多くは番組制作を経験していないので、番組制作方法を理解できない」、「エディターは沢山いるが、できる編集者は少ない」、「タレント不足」、「デザイナーがいない」、「効果マンがいない」など番組の品質管理能力を求める声や他セクションの能力向上を求める声が多く聞かれた。

(3) 今後の研修への期待

ア. 今後本研修においてより強調、新たに導入されべき項目

デジタル編集やコンピューター・グラフィック等の新しい技術を取り入れた研修要望が最も多かった。(現在でも最新技術紹介は研修の中に多少取り入れてはいる。)

また、新しい技術で番組を作った人や新しい演出方法を生み出している人の話を多く聞きたいという声や、もっと実習を多くしてほしいという声も聞かれた。

イ. 研修コースへの期待・要求

- 研修期間の延長(もっと多くの番組制作実習を、見学の時間をもっと多くなどの意見も含む)の要望が最も多かった。

他に

- 上級コースの新設
 - 研修応募の年齢制限の緩和
 - 子供向け番組の制作手法の伝達
 - NHK-CTIにドキュメンタリーの名作ライブラリーの新設
 - スタジオ番組制作手法
- 等の見が出ていた。

<パキスタン>

1. パキスタンの当該分野の概況、課題及び今後の方向

(1) 概況

ア. テレビジョン放送

a. 所管庁

放送局の監督は情報・放送省が所管し、放送局の免許、番組の規律などを行っている。パキスタンの公共テレビジョン放送であるパキスタンテレビ局 (PTV) の社長は同省大臣が兼務している。

なお、同省は、所管するラジオ放送及び印刷メディアについても ODA による支援を希望している。

b. 受信機の普及

受信機の普及台数は 1995 年時点で 280 万台(100 人あたり 2.2 台)程度となっている。

c. 事業体

パキスタンのテレビジョン放送は国有会社である PTV 及びパキスタン教育テレビ局 (PTV2) の 2 チャンネル及び国と民間の共同出資会社であるシャリマーテレビジョンネットワーク (STN) の 1 チャンネルからなる。

PTV は総合放送で 1964 年に放送を開始した。放送開始当時から 1970 年頃まで延べ 13 人の日本の専門家が番組制作、放送技術等の指導を行った経緯がある。放送は全国向け番組及び地方の一部の放送局で制作するローカル番組がある。この他、衛星による国際テレビ放送があり、国内向けには PTV2 のチャンネルを使用して放送(早朝 3 時間程度)している。

PTV2 は 1992 年に放送を開始した教育番組で、放送開始及び拡充のため 4 次にわたる無償資金協力「教育テレビチャンネル設立計画 (I) 及び (II)」及び「教育テレビチャンネル拡充計画 (I) 及び (II)」が行われている。

また、PTV は PTV アカデミーを有しており、ここでテレビジョン関係の研修、調査研究などを行っている。

PTV の収入源は受信料及び広告収入で、内訳は広告収入が半分以上を占める。

なお、STN は 1989 年に放送を開始しており、番組は衛星で受信した海外のものが中心である。

d. テレビジョン放送分野での日本の協力

テレビジョン放送分野においては上記 c の無償資金協力の他、研修員受入及び専門家の派遣により協力を行っている。1997 年度までの実績は、研修員受入延べ 43 名、専門家派遣延べ 26 名となっている。本件調査対象である番組制作 2 コースについては計 8 名 (1991 年以降) を受入れている。

イ. その他の番組制作関連分野

放送以外の分野ではアラマ・イクバル公開大学(Allama Iqbal Open University)での教材用の番組制作がある。同大学の番組制作施設は1995年に実施された無償資金協力「アラマ・イクバル公開大学機材整備計画」により整備された。

また、国立農業研究所も業務用の番組制作設備を有しており、過去同研究所からも研修員を受け入れている。

この他、放送局からの委託により番組を制作する民間のプロダクションが存在する。

(2) 課題

今回調査の対象とした組織に共通する問題は職員の高齢化である。これは、政府の方針により過去10年程度新人の採用が禁止されていたことによるものである。このため、職員の年齢構成が高く40歳を超える職員が現場の中心として働いている。今年から採用制限がやや緩和され新人採用が可能となるが、今後この年齢のギャップをいかに克服するかが課題である。

PTVの建物はイスラマバードの官庁街に位置し、重要政府関係組織として位置付けられている。また、組織、マネージメントともかなり高いレベルに達しているようである。他方、番組制作用設備は2世代前の相当に古いものを使用して今後改善が必要である。

PTV2はイスラマバード郊外に独自の建物を有し、設備も一定の水準にある。しかし、放送時間は1日4時間程度に限られており、今後の拡充が課題である。

(3) 今後の方向

パキスタンにおけるテレビジョン放送の発展は唯一の公共放送といえるPTVに負うところが大きい。

しかし、上記のごとく、職員構成の歪、旧式の番組制作設備、教育チャンネルにおける放送時間の拡大などの問題を抱えており、今後とも人材の育成と資金の確保が必要な状況にある。

2. 各関係機関の現状、問題点・改善点および日本に対するニーズ

(1) パキスタンテレビ局 (PTV)

ア. 現状

PTVには、1960年代に放送局立ち上げのためNHKを中心とした専門家が派遣されて以来、1995年にNHKより2名の短期専門家が派遣されている。

放送設備はかなり古いものを使用しており、現在の主流であるスタジオに機材を分散配置するシステムと異なり、カメラやVTR等をマスタールームで集中制御するシステムによって運用されている。

イ. 問題点・改善点

演出、技術職員とも高齢化している反面、使い慣れた環境でそつなく運用しているが、システムコンセプト・放送設備の古さは否めない。現状設備での放送内容の大幅な改善は困難と思える。

10年以上にわたり新人採用のないベテラン集団であるが、彼等の知識と実際の番組の質とのギャップをどう埋めていくかが問題である。

また、技術サイドと連携しての番組制作をしているかは不明であった。

後述するPTVアカデミーによる職員研修については、あまり期待を寄せていない。

ウ. 日本に対するニーズ

職員の高齢化と言う特殊事情から、研修生の年齢制限緩和への要求が特に強く、また、基礎的な研修よりも専門性の高い研修への要望があった。

- セットデザイン研修
- 中級以上のカメラマンのためのカメラオペレート・ライティング研修
- サテライトマネジメント、デジタル等の新技術研修
- 研修終了者へのリフレッシュ研修

(2) パキスタン教育テレビ局 (PTV2)

ア. 現状

教育テレビ局として1992年に開設された。PTVとは立地場所も離れており、全く独立した放送局の印象である。

イスラマバードの本局に4人、他にカラチに2人、ラホールに2人の計8人のプロデューサーが、各自平均毎週25分番組を1本を制作している。この体制で、毎日5時間の成人教育番組を放送している。

更に、後述の公開大学より、1時間の番組の提供を受けているが、再放送の多い番組編成と予想される。

イ. 問題点・改善点

1984年来、新人の採用がなく、PTV同様スタッフの高齢化が問題と思われる。また、PTV本局とは独立した運営であり、人的交流も多くない様子である。

現在の体制で放送時間を拡大し、一定品質以上の番組を安定して制作していくのはかなり難しいと思われる。

ウ. 日本に対するニーズ

PTVと同様の要求である。

(3) P T Vアカデミー

ア. 現状

1981年、パキスタン政府とP T Vにより設立された。(政府：3,390万ルピー、P T V：970万ルピー出資)年間予算は2,000万ルピーとのことである。

1998年よりP T V以外に対しても有料で研修を行っている。アカデミー内の講師が担当し、1週間から5週間までの多岐に渡る研修を用意している。

P T Vよりの旧機器をうまく活用しているが、全体のレベルは、不明ながらもあまり高くない印象を受けた。

1995年にP T Vに派遣されたNHKよりの短期専門家は、ここを会場にして研修を行った。他に、BBCの専門家が短期で来た事があるそうである。

イ. 問題点・改善点

一応の研修コースを用意しており、パキスタンのレベルとしては一応機能しているようであるが、P T Vや公開大学は、研修内容・研修費用負担等の制約により、あまり利用していないようである。

ウ. 日本に対するニーズ

P T Vと同様の要求に加えて、NHK放送研修センターの研修テキストを提供して欲しいとの要望があった。

(4) 公開大学

ア. 現状

1996年、日本よりの機材供与を受けて開設、最新の機材がある。

シニアプロデューサー3人、プロデューサー3人、アシスタントディレクター4人で、教材用のビデオ制作をメインに行っている。大学内のスタジオ設備以外に、中継車、ENGカメラ(3~4セット)も供与されており、外部での収録も多いとのことである。

P T V 2には、毎日1時間の成人教育番組を提供しているが、2000年6月からは、1.5時間に増加の予定である。

イ. 問題点・改善点

設備としては十分なものを有している。P T Vの設備が老朽化している現状で、この設備を放送にどう結びつけられるかが課題と思われる。

ウ. 日本に対するニーズ

エンジニアのトレーニングの要望があった。

3. 帰国研修員の研修評価、習得技術の活用・普及効果 及び今後の研修への期待

帰国研修員8名（番組制作2名、社会教育番組6名、だが1名死亡、1名不明で実際現状は6名、このうち公開技術セミナー参加者5名、また、8名の内5名がPTVの職員）の面談とクエスチョネアを総括すると以下のとおりである。

(1) 研修評価

スリ・ランカと同様に、研修の目指した目標と目的に全員が満足を感じ、研修の3本柱である講義、番組制作実習、それに見学それぞれに皆満足しており、研修への評価は高かった。

ただ研修の目標や目的については、コンピューターグラフィックを使ったより上級の研修等目的によりクラス分けすべきとの意見が出ていた。

(2) 習得技術の活用・普及効果

本研修ではスリ・ランカでも記述した通り、実習を通して、質の高い番組制作の方法の会得を大きな目標のひとつにしており、企画のたて方や取材、構成、編集、コメントの書き方などの基本実習の中からさらに高いジャーナリスト精神の会得を目指している。

ア. 研修で最も有益だったもの

スクリプト（コメント）の書き方や編集の方法、番組の企画の立て方、シーン・カードで構成・編集を練り直す方法など、実習で学んだものが多かった。「自国では音入れ作業は感と記憶に頼ってやるのに日本はペンと紙を使用する」と驚きの声をあげた人もいた。また、特定の名義をあげた人もいた。

イ. 帰国後、研修で得たものの自分の仕事・組織への活用

制作前にあらゆる情報を集める企画の仕方とか、“シーン・カード”を使っただけの構成の立て方や番組制作への系統的なアプローチの方法、編集方法など研修で学んだことが着実に生かされていた。殊に“シーン・カード”で番組の質を上げる方法は多くの帰国研修員に受け継がれ、実行されているようである。ただ、組織にまでは広がっていない。

「“シーン・カード”はペンと紙の使用を基本とするが、自国では書きとめる習慣がないので組織での適用は難しいが自分では活用している」という意見は印象的だった。

ウ. 活用に当たったの問題点

「タイム・コードのついた編集機がない」など機材が古いために折角日本で学んだことが、自国で生かせない事を嘆く声が多く聞かれた。また、番組の多くの部分をまだ感と経験に頼って制作している様子も感じられた。

PTVの大きな課題は、第2章 調査内容及び結果のパキスタンについての記述のとおり、政府の方針による過去10年程度の新人採用停止である。このため40歳を越える職員が、現場の第一線として働いている。新入職員がいないため、昇進もなく、採用時と同じディレクターの地位のままである。また機材も古い。こうしたことが職場に活気のなさをもたらしている様に感じられる。

一方40歳といえどもベテランで、自分の番組の制作方法も確立しており、なかなか他の人からのアドバイスも受け入れにくい。パキスタン（主としてPTV）から近年参加する研修員の平均年齢は40歳と高く、このため社会教育番組や一般番組の制作方法の基本に主眼を置いている本研修には、物足りなさも感じている。

(3) 今後の研修への期待

ア. 今後本研修においてより強調、新たに導入されべき項目

コンピューター・グラフィック、ハイビジョン等の新しい技術を取り入れた研修要望が最も多かった。

また、最新技術を使ったスポーツ実況、音楽や子供番組、ドラマ、討論番組等の研修の要望が出されていた。

イ. 研修コースへの期待・要求

- ドラマ研修やエンターテイメント研修、ニュース研修等分野別の専門研修新設の要望が最も多かった。

他に

- 上級コースの新設（コースレベルの基礎と上級への分割）

- カメラマンやデザイナーなどの他のセクションの研修

（→全体的な番組制作能力の向上をはかる為）

- 機材・リソースが不足している為リソース管理研修

等の要望が出されていた。

また現在の選考について「各国の参加者は、同じレベルの同じ目的を持った人を選んでほしい。」「異なった性格や文化の人々とグループを一緒にすべきではない。」等の意見が出ていた。

第3章 公開技術セミナー実施報告

1.実施概要

<スリ・ランカ>

- (1) 日 時 1999年5月27日(木) 9:30 - 16:00
- (2) 場 所 スリ・ランカ/ルパバヒニテレビ局 (SLRC) 内会議室
- (3) 参加者 帰国研修員を中心とした当該分野の関係者
帰国研修員 9名(10名中)の他、当該分野の関係機関 (SLRC、公開大学等) より29名、日本側スタッフ (事務所、大使館、専門家) 5名、合わせて43名の参加を得た。

(4) 内 容

ア.講義

以下の講義名で日本の放送政策、NHKの現状、プロデューサーに必要な素養についてをビデオ、OHP等を使用しながら講義した。各講義とも参加者からは、特に質問は出なかった。

- ・「日本の放送事業-現状と今後の動向」郵政省 大塚 隆史 氏
- ・「NHKの番組制作-最新技術の紹介」NHK 加藤 正憲 氏
- ・「番組制作の基本」(財)NHK放送研修センター 南 喜久 氏

イ.帰国研修員による番組発表及びアドバイス

各コース1名づつ、計2名の帰国研修員代表者が最近制作した番組(20分)を解説しながら発表し、それについて番組制作及び技術の観点からアドバイスをした。

ウ.現地派遣専門家による講評(スリ・ランカのみ)

現在、SLRCに派遣されている長期専門家/松岡住夫氏に日頃指導していることを改めてまとめてもらった。

本セミナーはSLRCの全面的協力を得て、非常に効果的に行われ、大盛況であった。セミナー内容が盛りだくさんであることに加え、SLRC幹部の呼びかけにより参加者も主にSLRCのプロデューサーから技術者まで幅広く多人数となり、テレビジョン番組制作技術の向上への関心の高さがうかがわれた。内容については参加者からは大変よい評価を得ることができた。

ただ、質疑応答や意見交換に十分な時間を割くことができなかつたことが残念であった。

なお、同日に行われた夕食会は、公開セミナー参加者の他、関係省庁の関係者らも含め情報交換・意見交換を行ない、広く関係者間の交流を深め、信頼関係を強化するよい機会となった。

(5) プログラム

10:00 -10:05	開会の辞 HCAスリ・ランカ事務所 狩野 所長		5分	JICA
10:05 -10:30	ビデオ 上映	国際協力事業団事業紹介 「それぞれの地平線（英語版）」	25分	JICA
10:30 -11:10	講義	「日本の放送事業 - 現状と今後の動向」 講師：大塚 隆史 氏（総括／放送行政）	40分	郵政省
11:10 -11:20	休憩		10分	
11:20 -12:00	講義	「NHKの番組制作 - 最新技術の紹介」 講師：加藤 正憲 氏（番組制作（技術）） *内NHK事業紹介ビデオ上映10分を含む	40分	NHK
12:00 -13:20	昼食		80分	
13:20 -14:00	講義	「番組制作の基本」 講師：南 喜久 氏（番組制作（プロデューサー））	40分	NHK-CII
14:00 -14:10	休憩		10分	
14:10 -14:50	発表 (ビデオ)	「テレビジョン社会教育番組II」帰国研修員代表発表 <発表20分、解説10分、アドバイス10分> Mr.KODIPPILI THANTILAGE	40分	帰国研修員 (SLRC) / NHK、 NHK-CII
14:50 -15:00	休憩		10分	
15:00 -15:40	発表 (ビデオ)	「テレビジョン番組制作」帰国研修員代表発表 <発表20分、解説10分、アドバイス10分> Mr.CHANDANA SENEVIRATHNE	40分	帰国研修員 (SLRC) / NHK、 NHK-CII
15:40 -15:55	講評	松岡 佳夫 氏	15分	JICA専門家
15:55 -16:00	閉会の辞 Mr.AMAL G. PUNCHIRIWEWA , Dy.Director General		5分	SLRC

<パキスタン>

- (1) 日 時 1999年6月2日(水) 9:30 - 16:00
- (2) 場 所 マリオット・ホテル内 KOHINOOR HALL
- (3) 参加者 帰国研修員を中心とした当該分野の関係者
帰国研修員 5名(8名中)の他、当該分野の関係機関(PTV、PTV2、
公開大学等)より24名、日本側スタッフ(事務所)2名合わせて31名の
参加を得た。
- (4) 内 容
ア.講義
イ.帰国研修員による番組発表及びアドバイス
ア.イ.とも<スリ・ランカ>に同じ。

本セミナーはスリ・ランカでの開催と同様、内容が盛りだくさんであり、また参加者もPTVのみならず、公開大学等多くの関係機関から、役職も幹部レベルから一般職員のプロデューサーから技術者まで幅広く多人数となり、盛況であった。テレビジョン番組制作への関心の高さがうかがわれた。内容については参加者からはよい評価を得ることができた。ただ、やはりパキスタンでも意見交換に十分な時間を割くことができなかつたことが残念であった。

なお、本セミナー途中に行われた昼食会は、公開セミナー参加者と最新の情報交換・意見交換を行ない、広く関係者間の交流を深め、信頼関係を強化するよい機会となった。

(5) プログラム

10:00 -10:05	開会の辞	团长 大塚 隆史氏	5分	郵政省
10:05 -10:30	ビデオ 上映	国際協力事業団事業紹介 「地球の明日を見つめて (英語版)」	25分	JICA
10:30 -11:10	講義	「日本の放送事業 - 現状と今後の動向」 講師：大塚 隆史 氏 (総括/放送行政)	40分	郵政省
11:10 -11:20	休憩		10分	
11:20 -12:00	講義	「NHKの番組制作 - 最新技術の紹介」 講師：加藤 正憲 氏 (番組制作 (技術)) *内NHK事業紹介ビデオ上映10分を含む	40分	NHK
12:00 -13:20	昼食		80分	
13:20 -14:00	講義	「番組制作の基本」 講師：南 喜久 氏 (番組制作 (プロデューサー))	40分	NHK-CTI
14:00 -14:10	休憩		10分	
14:10 -15:00	発表 (ビデオ)	「テレビジョン番組制作」帰国研修員代表発表 <発表20分、解説10分、アドバイス10分> Mr.Basharat Khan (機材トラブルにより10分延長)	50分	帰国研修員 (PTV) / NHK、 NHK-CTI
15:00 -15:10	休憩		10分	
15:10 -15:50	発表 (ビデオ)	「テレビジョン社会教育番組II」帰国研修員代表発表 <発表20分、解説10分、アドバイス10分> Mr.Asghar Ali	40分	帰国研修員 (NARC,PARC) /NHK、 NHK-CTI
15:50 -16:00	閉会の辞	Mr.Syed Qaiser Naqi Imam	10分	帰国研修員 (PTV)

2. 実施内容

(1) 講義「日本の放送事業_現状と今後の動向」

- 郵政省 大塚 隆史 氏

以下の内容を OHP の図表等により講義した。

ア. 放送事業の現状

- a. 日本の放送体制(テレビジョン放送、音声放送、CATV 等)の概要
- b. 衛星放送の現状と加入者数の増加
- c. CATV の現状と加入者数の増加
- d. 放送産業の規模及び成長率
- e. 日本経済における通信・放送産業の位置付け

イ. 放送事業の今後の動向(デジタル化の推進)

- a. 放送のデジタル化の意味
- b. 映像・音声市場におけるデジタル化の進展
- c. デジタル放送のイメージ
- d. 郵政省による放送デジタル化推進計画
- e. デジタル化の基本コンセプト
- f. デジタル化のマスタースケジュール
- g. 地上波デジタル放送の標準方式及び特徴
- h. 地上波デジタル放送導入スケジュール
- i. 諸外国における地上波デジタル放送導入状況
- j. BS デジタル放送の標準方式
- k. BS デジタル放送のチャンネル割当
- l. CS デジタル放送の標準方式
- m. CATV のデジタル化

(2) 講義「NHKの番組制作—最新技術の紹介」

- NHK 加藤 正憲 氏

以下の内容を、OHP、ビデオ試写、NHKの英文技術広報誌等により講義した。

- ・ 世界のテレビ保有分布の現状
- ・ スリ・ランカ、パキスタンにおけるテレビ保有の現状
- ・ 両国のテレビ事業拡大の可能性

- ・ NHKの活動現状：ビデオ "This is NHK" (約10分) デモ
 - 公共放送の意味
 - 衛星および地上デジタル放送のイメージ

- ・ 日本における衛星放送の普及状況
- ・ 日本におけるハイビジョン放送の普及状況
- ・ NHKの放送設備のデジタル化の現状
- ・ 衛星デジタル放送
- ・ 地上デジタル放送
- ・ 放送設備のデジタル化に関わる問題点
- ・ デジタルのメリット、デメリット

(3) 講義「番組制作の基本」

- (財)NHK放送研修センター 南 喜久 氏

以下の内容を講義した。

- ア. 高度情報化時代の番組制作者、ジャーナリストの役割
- イ. 番組制作担当者（PD）の心がけべきこと
- ウ. 番組制作の基本——ドキュメンタリー番組を中心に
 - a. なぜドキュメンタリー番組か
 - b. 企画について
 - c. 構成について
 - d. ロケーションについて
 - e. 講義者の体験から
 - f. 編集・コメントについて
- エ. 結び

[概要説明]

<アについて>

デジタル化、多チャンネル化などハード面が限りなく発達し、変化しているが、唯一変わらないものは国民・視聴者のために正しい情報や良質な番組を提供するということ。それだけ皆さんは重要な仕事をしており、かつ責任も重い。高いジャーナリスト精神が大切。

<イについて>

- 番組制作者はそれぞれ番組へのしっかりしたメッセージを持つこと。
- ・そして面白くあるべき。面白いというのは単なる笑いでなく、深みがあり、感動があるもの。（各国で評判を呼んだドラマ「おしん」の魅力について説明）
 - ・ストーリーが分かり易いこと。
 - ・独善的でひとりよがりでないもの。（映画とテレビの違いについて）

<ウについて>

- a. 何故ドキュメンタリー番組かといえば、ドキュメンタリー番組には番組制作に必要な要素がほとんど含まれており、能力を高めるのに良い。
 - ・学んだことは他の番組制作にも幅広く応用できる。
 - ・様々なドキュメンタリー番組の種類の中、これからは企画性の強いものにしばって話をすすめる。
- b. まず、最も大切なのは企画を立てること。NHKのPDは企画探しに多くの時間を費やす。ここで大切なのは「番組のメッセージは何か」ということ。
 - ・NHKの番組セクションでは通常月に一度番組の提案会議をもち、2～3か月先の放送予定を決める。各PDはこの日に備えて準備した企画を提案表に書き、会議にのぞむ。上司や先輩達から「番組のメッセージは何か」と鋭い質問せめにあう。それでも提案が通れば予算もつき、番組制作に取り組めるからよいのだが、落ちるとみじめ。この日はPDにとって本当に嫌な一日。
 - ・人間を通してテーマに肉薄する一つの方法。主人公選びは細心の注意を。
 - ・切り口の新鮮さ。（安間 総介氏の番組「空白の110秒」を例にして）
- c. 構成について。どのように番組を分かりやすく、面白く、感動的にしていくか。
 - ・番組はシーンの積み重ねによって成り立っているが、この時シーンカードを使う
 - ・カードに大きな字で各シーンの意味を書き、壁に張りつける。構成が最もふさわ

しくなるまで何回も入れ替え作業をする。最良のものを書き写し構成表にする。

・スクリプトは考えるがまだ書かない。

d. ロケーションではまず大切なのがカメラマンとの関係。

・映像を撮るのはカメラマン、良く番組の主旨を理解してもらう。それにNHKのカメラマンはベテラン。議論をし、良いものは取り入れ、構成も変える。

・構成表はフレキシブルに。ロケにおいては現場が一番大切。「せっかく苦労して書きあげたのだから」と固執せず、現場の状況にあわせて構成をかえる。特にヒュウマンドキュメンタリーや社会派番組など。・出演者との関係は大切に。

e. 講義者の苦い体験から。35年前NHKに入り、北海道に赴任。当時の農村は貧しかったが、この地は特別。ここにその数年前から国の酪農モデル建設が始まったので「これこそ未来の農村のモデル」として放送で度々全国に紹介。

それから10数年後この地を再訪、外見上の素晴らしさに目を見張るとともに農家の内情を聞くにつけ顔面蒼白。借金地獄に苦しんでいたのだ。その額は一戸平均7000万円、経営を続ける程赤字が増え続ける状態。「何故こうなってしまったか」「誰がこうしたか」、これをテーマに長期の番組に取り組み、一生懸命働いて赤字の増え続けた農家とこの地の指導に長くあたった前農協組合長を軸にその究明に取り組み。問題はこの前組合長。彼は酪農の理想郷を目指して労を惜しまず働いた立派な人だったが重い口をなかなか開いてくれない。前組合長の本当の姿を描くことの必要性を誠心誠意お願い。訪問後20回位たってからようやく全面協力を約束してくださり、カメラの前で無念の涙を流される。この表情から前組合長をはじめ、皆全力で働いたのに報われない不思議さが浮かび、余りにも近代化を急ぎ過ぎた国の農政、牛乳を取り巻く厳しい国際情勢など背後の要因も浮かびあがる重い番組となる。

つらい体験。真心を尽くせば道は開けることも学ぶ。

f. 編集前に撮影ビデオを見直し、構成を練り直す。編集は映像の論理で行われるのでカメラマンと同様編集マンと良く打ち合わせを。(時間制約上音響効果略)

・構成を何回も練り直すのは、ひとえに番組の質を上げるため。

・コメントはこの時に書く。映像と音・音楽、コメントが相乗効果を表すために。

<エについて>

各国に必要な放送を、そして各国の人々の福祉や向上に役立つ放送をどんどんやってほしい。

(4) 帰国研修員による番組発表及びアドバイス

～ NHK-CTI 南氏より番組制作プロデューサーの見地から ～

<スリ・ランカ>

ア. テレビジョン社会教育番組II 92年帰国研修員Mr.Anura Kodippili THANTILAGE

番組は解説者の案内でスリ・ランカの険しい山中へと導かれ、その山の様子や滝などの美しい風景や珍しい植物、花、それに山中で暮らす人々の生活を紹介した紀行的ドキュメンタリー。

(アドバイス)

- 取り上げた内容は地域に根ざしておりとても良い。
 - コメントと映像、音楽の関係も随所に光るものがあった。
 - 見せたいものは、きちんとアップで見せ、好感が持てた。
- ただ、
- テンポがやや遅すぎる。(タイトルが出るまで音楽と映像のみで3分以上経過)
 - 大切なものや珍しい花などにはスーパーインポーズが必要。(殆どタブリ無し)
 - 解説者をたてると番組が客観的になってしまう。
 - 「深山の植物」にテーマをしぼったら更に良い番組が出来たかも。同じように山中の生活者から番組意図にそった主人公を見つけ、その人の生活を克明に追い、その人の住む自然・風土をはめこむ描き方をしたらより感動的なドキュメンタリーになったかも。そして良いドキュメンタリーが2本出来たかもしれない。

イ. テレビジョン番組制作 98年帰国研修員Mr.Gamlakshage Chandana SENEVIRATHNE

スリ・ランカの海辺の美しい風景やそこでリゾートを楽しむ観光客、亀の生態、宝石を掘る人々、その宝石を売る人々、ヤシを取るさまなど海辺周辺の様々な事柄を盛り込んだ紀行的ドキュメンタリー。(1時間番組なので途中で試写中断)

(アドバイス)

- テンポが良い。特にDVEを使ったりしての開始のテンポは抜群。
 - カメラ良く編集も良い。(個々のショットは大変きれい)
 - 音楽、コメント、映像の関係も良かった。
- ただ、
- 番組にはストーリー性、物語性がほしい。(同じようなものをだらだら見せられたら飽きてしまう。)
 - 個々の話題は面白いので、例えば「宝石を掘る人々」、「ヤシの文化論」、「亀の生態」等それぞれにもっとズームインして描いたら、それぞれ素晴らしい番組になるかもしれない。

<パキスタン>

ア. テレビジョン番組制作 97年帰国研修員 Mr.Basharat KHAN

パキスタンの恋愛や風俗をコミカルに扱った、劇場中継風ドラマ。

* 試写準備のために多くの時間が取られた為、内容を見る時間は殆ど無かった。

** 内容がウルドゥ語のため、ストーリーの意味が分からなかった。

(アドバイス)

- (見たかぎり) カット割り、カメラの動き、証明など素晴しかった。
- 役者への演技の注文も的確に行われたと察せられる。(表現が上手)
- 42歳(番組担当者)のベテランさを感じた。

イ. テレビジョン社会教育番組II 92年帰国研修員 Mr.asghar ALI

パキスタン市街の人々の生活、風俗、鶏や魚を殺す様子、逞しく生きる女性たち、肉を売る人々、ゴミの山と不潔な町の様子、議論をする人々など凄じい映像の連続。

* この番組を担当した帰国研修員は、セミナーで専門家からアドバイスを受け、それから編集するものと勘違いしていた。

(アドバイス)

- いろいろな所について沢山の撮影をした。インタビューも沢山している。素晴らしい。(本当に担当者の情熱が感じられた。)
- しかし、
- 何かに焦点を絞り番組の視点をはっきり持った方が良い。
- 例えば「ゴミ問題」とか「どっこい頑張っている女性達」とか。
- もし女性を描くなら主人公または数人の女性を選び、彼女たちの一日の生活を克明に記録したら分かりやすく、感動的な番組になるであろう。

～ NHK 加藤氏より技術的見地から ～

<スリ・ランカ><パキスタン>両国の各番組発表について共通したアドバイス

- 系統的な番組制作手法の再確認
- 台本による技術と演出サイドの情報共有の重要性
- 効果的なテロップ使用
- カメラアングルの重要
- 舞台中継におけるカメラの役割分担
- 編集タイミングの重要性
- オープニングの重要性、視聴者を引きつける編集

また、NHK-CTI南氏、NHK加藤氏両名から共通して、両国ともに自分たちの番組を放送後に評価する機会、および視聴者からの番組に対する感想を受け取る回路がないことについての問題意識を目覚めさせるため、調査団からの一方的なアドバイスばかりでなく、セミナー参加者同志でお互いに意見を述べ合う機会を設けた。仲間の番組を批判的に視聴し批判しあう事で、自らの番組制作の欠点をみつけることができ、新人の研修・訓練に最適な方法となる。

(5) JICA専門家 松岡 住夫 氏による講評 - 要約 - (スリ・ランカのみ)
(NHK所属、現在スリ・ランカノルパバヒニテレビ局へ長期専門家として派遣中)

2年間、皆と番組制作をやってきた。そのなかでいろいろ貴重なアドバイスをしてきた。しかしそのうちのいくつかは取り入れられたが、他は今も実行されていない。その原因は次のものと考える。

- ア. 有能なプロデューサーの数が少ない為、特定の人材に同時にいくつもの番組制作が任されてしまい、とてもどうしたら番組制作手法が良くなるかを考える時間がない。
- イ. 予算が少ない為、事前調査、準備、台本作り等に費用が使えず、おのずと投げやりになる。

しかしこのような困難はSLRCだけの問題ではない。番組制作の基本、ベースは世界共通である。難問も知恵と勇気をもって当たれば突破口は開ける。

より良い番組を制作するために、以下のとおり5つのアドバイスを再度提案する。

- ア. 番組企画時にもっと事前調査、情報収集、事前準備をしっかりとやること。SLRCは大部分の番組でこれが不足している。これがなければ番組は絶対良くならない。
- イ. 調査が終わったら、しっかり台本を作ること。SLRCではしばしば台本なしで番組を作っているシーンを見るが全くナンセンスで、プロの仕事ではない。これでは絶対に良い番組は作れない。
- ウ. 制作に入る前にプロデューサーは全スタッフを集めて番組意図、作り方、注意点などを必ず打ち合わせをすること。そして又その打ち合わせの中でカメラショット、スイッチングの仕方、ライトチェンジ、音声タイミング等を決めて台本に記入すること。
- エ. 納得が行くまでリハーサルをしっかりとやること。これで番組の良否が決まる。
- オ. 放送終了時にはしっかり反省点を整理し、解決案も考えること。そしてそれをレポートにまとめ上司に提出すること。

3. アンケート集計

<スリ・ランカ>

(1) セミナー参加者氏名及び現職（役職／部署／組織名／組織形態）

添付資料 4.「セミナー参加者リスト」参照。

(2) 本日のセミナーに対するコメント

ア. 講義「日本の放送事業 - 現状と今後の動向」 郵政省 大塚 隆史 氏

- ・良かった。多くの情報を含んだ発表。
- ・良かった。
- ・我々にとってためになるセミナーだった。
- ・良かった。
- ・良かった。
- ・良い発表だった。技術データがもっとあればさらに良かったらう。
- ・素晴らしい発表だった。テレビ技術の現在の状況に関するデータがあれば更に良かったと思う。
- ・興味深く、情報豊富だった。
- ・情報量が大変豊富。
- ・講義を通じて沢山の事を学んだが、専門的すぎた。
- ・日本の放送システムについて多くを学んだ。特にデジタル放送と衛星放送について学べた。
- ・講義内容のすべてが技術的な事だったので、専門的すぎると感じた。配付資料は有益だった。
- ・良かった。有益だった。
- ・将来性についての良い講義だった。
- ・情報豊富な講義だった。
- ・日本の放送技術についての大変効果的な講義だった。
- ・明解で良かった。
- ・良くまとめられていた。
- ・知識豊富で有益だった。良く準備された配付資料。講義内容は少し専門的すぎたので、我々のスタッフは より多くの説明が必要だったと思う。
- ・現在の技術と将来のデジタル技術の交換についての分かりやすい概要説明。
- ・MPTの方針と将来計画の情報がたくさんあった大変良い講義だった。番組のデジタル化は時間がかかるが、疑いと問題点を克服する必要がある。
- ・放送の分割ネットワークの説明と、デジタル放送の利点等、良い講義だった。
- ・良かった。配付資料は大変便利だった。
- ・興味深く良い講義だった。小冊子の形でより多くの詳細について得られれば良かったと思う。
- ・最新技術のよい紹介法だった。

イ. 講義「NHKの番組制作 - 最新技術の紹介」 NHK 加藤 正憲 氏

- ・情報量が豊富で良かった。
- ・良かった。
- ・良かった。
- ・大変良かった。
- ・良かった。
- ・情報豊富。
- ・大変情報量豊富。
- ・情報量豊富で良い発表だった。デジタル通信に関するより多くの詳細があれば更に良かった。
- ・技術者としてこの講義は大変重要であり、たくさんの事が学べた。
- ・情報量豊富な講義。
- ・日本のデジタル放送技術について学べたので、大変有益だった。
- ・沢山の謎が講義によって解けた。
- ・最新テクノロジーをこの講義で得ることが出来、我々の国のデジタル化の遅れを感じた。
- ・良かった。NHKの知識、最新の技術、業務について知ることが出来た。
- ・テレビの将来について、斬新な事柄を学べた。

- ・情報量豊富で沢山の知識を得られた。
- ・最新技術の実施研修を受けられたら、プロデューサーにとって良いだろう。
- ・明解で良かった。
- ・良かった。
- ・情報量豊富で有益だった。SLRCの将来開発のための幾つかのアイデアを得ることが出来た。
- ・アナログ化からデジタル化への移行の問題点と利点についてよく整理された資料を使い、分かりやすく説明していた。
- ・最新の技術と将来計画についての幾つかのアイデアが得られた。
- ・NHKの最新技術を知る事が出来た。講義は興味深かった。
- ・技術者の私にとってたいへん興味深い内容だった。
- ・良い説明だった。

ウ. 講義「番組制作の基本」 (財) NHK放送研修センター 南 喜久 氏

- ・良かった。
- ・大変良かった。
- ・良かった。
- ・大変良かった。
- ・多くの情報があり良かった。
- ・情報豊富。
- ・良かった。
- ・技術者として大変興味深い講義だった。
- ・良かった。
- ・良かった。
- ・番組監督として南氏の講義は有益であり、NHKがどのようにドキュメンタリー番組を製作するのか学べた。
- ・この講義は私のテレビ番組制作に関する知識の向上に役立った。
- ・番組制作のすべての手順を大変分かりやすく説明していた。番組制作の重要点は明解に提示されていた。
- ・番組制作のための興味深い点を提示していた。
- ・資料を配付されたらより良かったと思う。
- ・我々の幅広い経験を思い出した。
- ・番組プロデューサーにとって番組制作について学べる良い講義だった。
- ・明解で良かった。
- ・良かった。
- ・講義者自身の経験を含めた興味深い講義だったが、少し聞こえづらい部分もあった。
- ・素晴らしかった。
- ・NHKの番組制作について幾つかのアイデアを得た。
- ・興味深かった。良い番組制作の方法についての知識を得ることが出来た。
- ・番組制作の知識を増やせた。
- ・良い説明だった。

エ. 帰国研修員による番組発表

- ・さらなる向上のための番組分析の討論があれば良かった。
- ・良かった。
- ・情報が多く良かったが、改善の余地はある。
- ・日本人専門家によるコメントはプロデューサーにとって大変有益だった。
- ・良かった。
- ・良かった。
- ・良かった。長所、短所が明確に提示されていた。
- ・興味深かった。
- ・発表の後の専門家からの貴重なコメントが聞けて良かった。
- ・時間の関係ではんの少しの番組しか上映されなかった。
- ・普通。
- ・日本人専門家の建設的な意見も含めた地元プロデューサーによる優良な番組上映だった。
- ・良かった。日本人専門家からの有益なアドバイスを得ていた。

オ. その他

- ・配付された資料は有益でフォローアップチームは大変友好的だった。
- ・フォローアップチームのメンバーは大変友好的で、知識豊富だった。セミナーで配付された資料は情報豊富で有益だった。
- ・フレンドリーな環境。
- ・このセミナーのような機会があれば我々はもっと知識を得る事が出来るだろう。
- ・帰国研修員の地元や国外でのセミナーや研修を計画するのはどうだろうか。
- ・効果的な番組脚本制作と番組制作技術。
- ・テレビ制作分野において日本人専門家の知識は我々にとって大変重要であり、これらのセミナーは意義深いものである。
- ・このセミナーを開催してくれたJICAに感謝したい。プロデューサーにとってこれらのセミナーは大変有益だ。私は日本で番組制作について学んだが大変役立っている。
- ・研修プログラムにはより多くの実用的なセミナーが含まれるべき。
- ・番組制作計画法、EDMを使ってのオフタイムの編集と、生産性の向上。
- ・フォローアップは大変有益である。

(3) テレビ番組制作分野の研修について、日本に期待するアイデアを述べて下さい。

- ・プロデューサーの技術知識を増やす事、ポストプロダクション技術を向上させる事。
- ・音響資機材の有効的活用についての短期実施研修プログラム。
- ・デジタル・ポストプロダクション技術についての研修。
- ・デジタル・ポストプロダクション技術についての研修。
- ・デジタル・ポストプロダクション技術についての研修。
- ・デジタル・テレビ番組制作についての研修。
- ・デジタル放送技術と衛星放送技術の最新技術をよく構成された研修を通じて、番組プロデューサーとテレビ監督に紹介すること。
- ・21世紀のための経済・ビジネスの分野に関するテレビ番組制作研修に参加したい。
- ・デジタル・ポストプロダクション技術についての研修。
- ・番組制作の新しい手法、最新の技術、デジタル編集、撮影カメラワーク、そして、ペイントボックス等が新しい研修プログラムに含まれば良いと思う。
- ・将来、日本で使われているデジタル技術についての研修が必要だと思う。
- ・デジタルテレビ番組制作、デジタル放送、ステレオ/音声多重放送、テレテキストシステムの研修と、デジタルテレビ機器と最新技術の実施研修。
- ・3Dアニメーションと関連ソフトとハードウェア。
- ・テレビ番組制作の最新技術。
- ・番組制作についての技術（番組内容と技術）、デジタル編集、DDテクニックの導入。
- ・高価なフォーマット使用を最小限に押さえるための効果的なオフライン編集法の紹介。

<パキスタン>

(1) セミナー参加者氏名及び現職（役職／部署／組織名／組織形態）

添付資料 4.「セミナー参加者リスト」参照。

(2) 本日のセミナーに対するコメント

ア. 講義「日本の放送事業 - 現状と今後の動向」 郵政省 大塚 隆史 氏

- ・良かった。
- ・情報量豊富。新しい技術とその使用方法の紹介。
- ・良かった。
- ・日本の放送に関する状況を理解するのに役立った。
- ・よく考えられた発表だった。
- ・情報量豊富。新デジタル技術の紹介は良かった。
- ・情報量豊富。
- ・良かった。
- ・情報量豊富で良い講義だった。
- ・良かったが、少し視野を広げたらより良いと思う。
- ・情報量豊富で良かった。
- ・情報量豊富で良かった。
- ・まあまあだった。この講義で使われたビデオは質が悪かった。
- ・良かった。
- ・まあまあだった。
- ・良かった。
- ・大変良かった。
- ・日本の放送プロジェクトについての役立つ情報がまんべんなく盛り込まれていてよかった。

イ. 講義「NHKの番組制作 - 最新技術の紹介」 NHK 加藤 正憲 氏

- ・有益だった。
- ・良かったが、説明をもう少し増やしてもよかったと思う。
- ・良かった。
- ・最新の技術に比べて、高画質テレビの開発と改善は現時点において最も重要である。
- ・情報量豊富な講義だった。
- ・良かった。
- ・簡単ではあったが、良かった。
- ・講義内容は1996年以来変えられていない様だった。
- ・デジタル技術の講義は日本の情報も得られて良かった。
- ・NHKのよい紹介だったと思うが、細かい説明が多すぎた。
- ・題目に関する優良な知識を含んだ素晴らしい講義だった。
- ・講義はよく整理され、デジタル技術に関する情報もあり、良かった。
- ・アナログからデジタル化への移行に生ずる問題の提起がありよかった。
- ・効果的な講義。
- ・情報豊富で、興味深く良い講義だった。
- ・良かった。
- ・良かった。
- ・良かった。
- ・素晴らしい講義だった。
- ・題材が良く、有益だった。

ウ、講義「番組制作の基本」 (財)NHK放送研修センター 南 喜久 氏

- ・良かった。
- ・MP-3、MP2、デジタル化以来、番組制作にコンピューターがより深く関わってきている。デジタル技術に関してはほとんどの人々が十分な理解をしていない。
- ・良かった。
- ・大変有益で、制作プロセスの知識を得られた。
- ・情報量豊富で革新的な発表だった。映像を使ったらさらに良かったと思う。
- ・良かった。
- ・講義は基本的なことばかりだった。与えられた情報のレベルは比較的低く、経験例は活用できそうもなかった。
- ・英語が理解しづらい部分があった。
- ・講義者とセミナー参加者のコミュニケーションギャップがあった。印刷物を希望する。
- ・良い講義だったが、映像によるサポートがあればより良かった。
- ・講義で日本語英語を聞き、1996年にTICで受けたテレビ番組研修を思い出し、幸せな気分だった。
- ・よく整理された良い講義だった。
- ・初心者レベルだと思った。
- ・素晴らしかった。
- ・ビデオのサポートがあれば良かった。
- ・自分は技術者なので、あまり興味深くなかった。
- ・良かった。
- ・題材が素晴らしいと思ったが、講義中、その内容は完全にはカバーされていなかった。

エ、帰国研修員による番組発表

- ・ビデオは巻き戻しの上映なしでよかったと思う。
- ・情報量豊富で幅広い説明があった。
- ・プロフェッショナルな発表。
- ・良かった。
- ・詳細についての説明の時間をとるべきだった。
- ・改善の余地あり。
- ・下手な発表だった。
- ・改善の余地あり。
- ・良かった。
- ・技術的な問題が幾つかあり、改善の余地がある。
- ・改善の必要がある。
- ・幾つかの技術と照明の問題を除けば良かったと思う。
- ・2つのビデオ番組は良かった。
- ・合格。
- ・まあまあだった。

オ、その他

- ・デジタル技術、データコミュニケーション、インターネット技術、ネットワーキング等の情報は役立つだろう。
- ・良かったが、意見交換は少なくしてより沢山の講義をした方が良い。

(3) テレビ番組制作分野の研修について、日本に期待するアイデアを述べて下さい。

- ・知識、デジタル技術の情報、コンピューター等現在世界に幅広く広まっている事柄を提供する機会を増やす。
- ・新編集法、コンピューターグラフィックス。
- ・発展途上国の一員として資源の管理はより多くの注目を受けるべき分野であると感じている。
- ・番組構成と開発の新アイデアにより重点を置くべき。最新技術の使用法の紹介も含めることができると思う。
- ・JICAに、特にドラマ、ドキュメンタリー、音楽番組の専門コースの開設を提案する。その場合、年齢制限は厳しくしない方がよいだろう。

- ・ JICAはテレビ番組制作とデジタルテレビ録画と送受信の研修プログラムを提供できるだろう。
- ・ デジタル技術の研修。
- ・ 研修では長い時間を費やす多すぎる事柄がカバーされているので、短期間でも取得できるように工夫すれば良いと思う。
- ・ 放送管理、共有ネットワーク、政策実行、日本の放送管理法等についての研修を上級放送管理者レベルで年齢50歳以上の者に提供する。
- ・ テレビネットワークと放送の管理。
- ・ 操作と整備を含めた技術研修と、番組制作最新技術の研修。
- ・ テレビ番組制作の研修は高い必要性がある。
- ・ テレビ番組制作のためのコンピューターの使用、得にアニメーションに関するものは弱いので、更に効果的で興味深い番組を制作するために、より多くの研修を必要としている。
- ・ 技術、研修、最新の資機材は番組制作を向上させるだろう。
- ・ カメラ技術と照明、ならびにデジタルシステムでの制作法。
- ・ ドキュメンタリーと討論番組。
- ・ 帰国研修員と会うのは研修成果の実用性を知るためには素晴らしい方法だと思う。それゆえに、大変素晴らしいセッションだったと思う。

第4章 総括所見及び今後の研修コースへの提言

1. 本調査を通しての総括所見

スリ・ランカ及びパキスタンにおいて各約1週間、テレビジョン番組制作に係るの機関を訪問し、実情を調査するとともにこれまでの研修参加者に面談して研修の成果等を聴取した。

これらの調査を通じて共通することは、関係機関の幹部及び研修参加者ともに本件研修コースに対する評価が非常に高いことである。また、研修参加者の派遣元組織への定着率も高く、将来の研修に対する増枠が関係機関から要請された。このような評価の高さは単に先方の儀礼的な発言によるものではなく、次のような具体的理由によるものである。

- ・研修参加者の研修参加後の能力の向上を組織の幹部が実際に認識していること
- ・多くの研修参加者が研修で得た新しい知識を自らの仕事の中で活用し、結果を得ていること
- ・研修コースの内容が座学に偏らず、実習を多く含む実践的なものであり、帰国後の仕事に適用し易いこと
- ・他の援助供与国が同種の研修コースをほとんど提供しておらず、番組制作関係ではほぼ世界で唯一のレギュラーコースであること

スリ・ランカ及びパキスタンでの今後の放送の発展は公共放送であるSLRCとPTVによるところが大きい。これらの機関では教育番組の充実など、なお番組制作面での課題を有しており、一層の人材の育成が必要な状況にある。また、今後の研修コースの設定に対しては、例えば、SLRCにおいてはコンピュータグラフィックなどを利用した高度な番組制作技術と子供向け番組の制作手法の指導、PTVにおいては職員の高齢化による年齢制限の上限の緩和、上級コースの設定など、それぞれの機関の事情を反映した種々の要望が述べられた。今後、研修コースの設定に当り、これらの要望に可能な範囲で応えていくことが望ましい。

以上のとおり、本件研修コースは研修成果が帰国後活用されているとともに、関係機関の評価及びニーズが高い。したがって、本件研修コースは、本調査によって得られた情報等を元に一層の改善を図り、引続き開発途上国向けに提供していくことが望ましい。

なお、調査期間中に実施した技術セミナーについては、最新かつ基本的な情報の提供という点で概ね有益なものであった。

2. 今後の研修コースへの具体的提言

(1) フォロー・アップ調査の結果

今回フォロー・アップ調査をした2つのコース「テレビジョン番組制作」（一般番組の講義と制作実習、それに見学を通して番組制作の基本を習得）、「テレビジョン社会教育番組」（主として社会教育番組の講義と制作実習、それに見学を通して社会教育番組と番組制作の基本を習得）に対する研修員の評価はここ数年「研修への満足度」90%以上、「帰国後の活用度」80%以上と非常に高い。

しかしながら、実際に帰国後も研修が生かされているのか疑問であったが、帰国研修員の活躍ぶりを目のあたりにし、また関係者等との面談から、研修内容が着実に生かされ成果を上げてきていることが確認できた。

今後とも2つの研修コースを継続し、更に充実・発展させ、発展途上国の番組制作者の人材育成に一層寄与していく必要がある。

(2) 2つのコースのより充実のために

ア. 研修目的、内容

一般番組、社会教育番組という差はあるが、どの番組にも共通して「誰に」「何を」「どんな手段で（ドラマ、ドキュメンタリーなど）」「どのように（分かり易く・面白く）」伝えるかという基本的な事を会得し、研修を通して高い番組制作者としての精神も会得するという目的は継続しつつ、帰国研修員から多くの要望があった新機材の一層の活用等、デジタル時代に備えた内容へと充実していく必要がある。

イ. 割当国、選考について

現在割当国の対象は全世界であり、年毎に応募者数も増えてだいぶ上記アの研修目的に添った研修員を選べるようになってきたが、研修員の選考についてはパキスタンでの指摘にもあるように、参加国により研修員に年齢差やそれに伴う能力差、英語力の差、専門分野の違い（ニュース、ドラマ等）等があり、これについてどのように対応するかという課題は残っている。

ウ. 研修期間

「テレビジョン番組制作」は10週間あり、比較的充実した研修が行えるが

「テレビジョン社会教育番組II」は7週間であり、スリ・ランカ、パキスタン両国で期間延長の要求が多かった為、10週間に延長することが望ましい。

エ. 定員

「研修中、単独でオリジナル番組を制作したかった」という帰国研修員の声のように、グループ実習においては研修員数は少ない方が効果が上がる。また、使用機材の関係からも両コースとも現在の10名という定員は維持すべきである。

(3) 新設コースとして望まれるもの

ア. 「上級テレビジョン番組制作」

今回フォロー・アップ調査した2国に限らず、途上国では放送局のトップや経営者は放送未経験者が多い。このため番組の質が良ければ褒め、悪ければ叱るというNHKの様な上司と部下との緊張関係が生まれにくく（NHKの場合は管理者全員がベテラン経験者である）、そのため番組の質の管理もおろそかになりがちである。

その点を補うためにも以下のようなテレビ番組制作の上級者を対象とした研修コースの新設が望まれる。この研修は帰国研修員を核にして各国の放送局を活性化して行くことが十分期待できる。

研修目的… 番組の善し悪しを見抜く能力「番組の品質管理」と「部下や後輩の指導」及び「経営管理」の3点の能力育成を目指す。

研修内容… 講師はNHKの様々なジャンル、例えばドラマやドキュメンタリーなどの第一線で活躍中のチーフ・プロデューサーを中心に、彼らの作ってきた番組及び講義によりその番組にかける想いや部下の鍛え方など語ってもらう。また経営についても学ぶ。

研修期間… 3週間前後。

参加資格… 現在番組を制作している者、又は番組制作を続け、現在管理職になっている者で未経験者は対象外とする。年齢制限は50歳までとする。

イ. その他

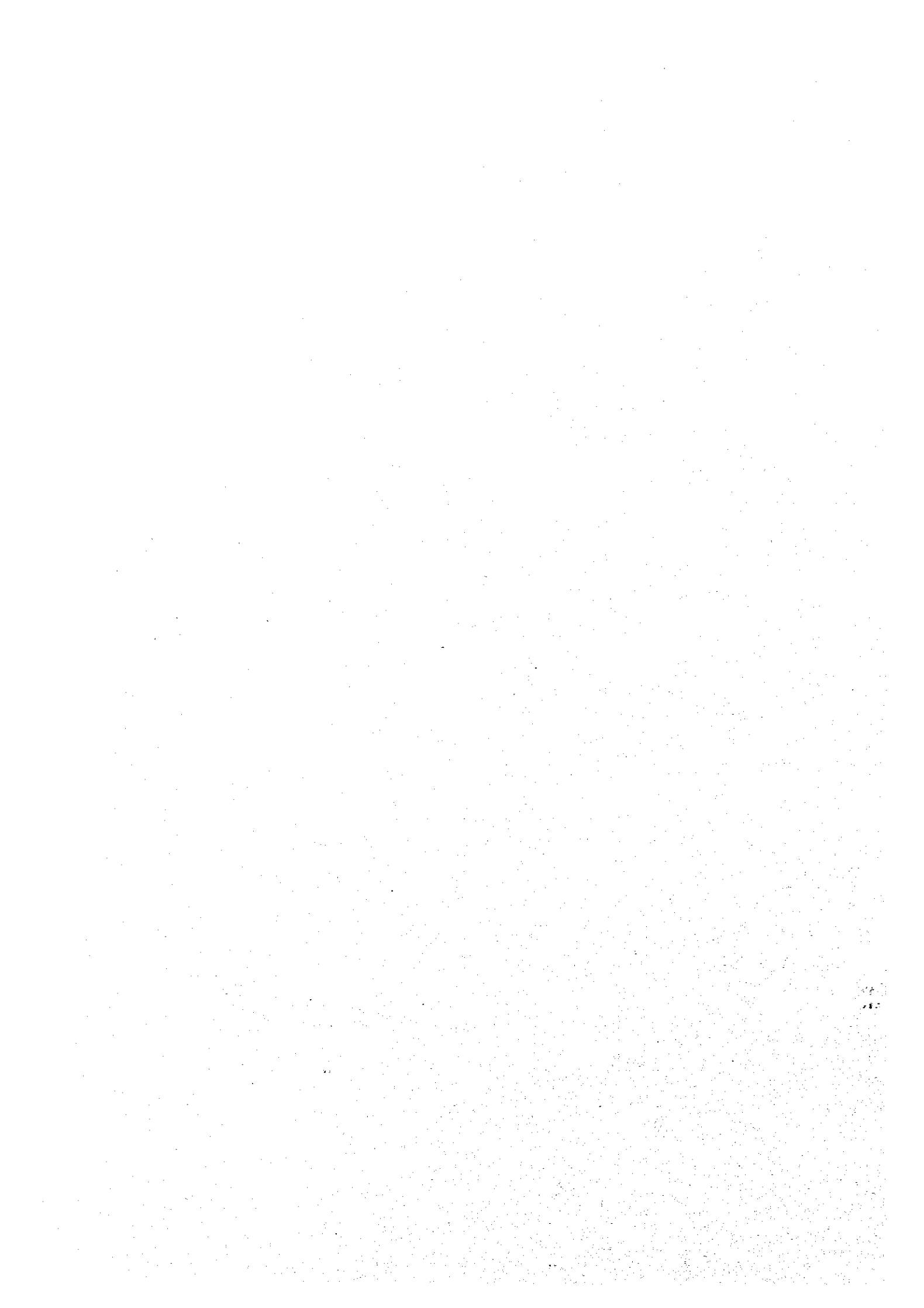
この他番組別の専門研修のコース設立要求が多くあったが、例えばドラマの例で見ると、スタジオ・セット代だけでも当研修予算をはるかにオーバーし、そのほか役者や衣装、台本代、さらに各役者への通訳代、スタジオ借り上げ代など、実現不可能な莫大な費用が予測されなど、多くの問題を含んでおり、（エンターテイメント番組も同じ）かつ、実現しても効果は未知数である。

(4) 結び

放送関係者の人材育成を主眼としている現在の2つの研修の一層の充実・発展を図りながら、「上級テレビジョン番組制作」コース新設も望みたい。

添 付 資 料

1. コース概要
2. 帰国研修員リスト（定着状況）
3. 主要面談者リスト
4. クエスチョネア 各国毎
(技協窓口省庁／関係省庁)
(研修員所属機関)
(帰国研修員 集計)



1. コース概要

- ・ テレビジョン番組制作 (7月初旬～9月中旬 2.5ヶ月)
- ・ テレビジョン社会教育番組II (1月中旬から3月中旬 2.0ヶ月)

○ 定員：10名

○ 使用言語：英語

○ コースの目的：

テレビ総合番組制作、社会教育番組制作に携わるプロデューサー及びディレクターを対象に、わが国の総合番組制作、社会教育番組制作に関する基本的な知識及び技術を紹介する。また併せて放送分野の最新技術、将来の展望についても紹介する。本研修を通して参加者はNHKの役割や特徴を理解し、テレビジョンによる社会への影響の重要性の再認識すると共に番組制作に必要な企画力・演出技法等の習得を目指す。これにより開発途上諸国の放送事業の発展に貢献し、ひいては人々の生活・教育水準の向上に図るとともに、我が国との友好親善の推進に寄与する。

○ 対象：テレビ局において番組制作に従事するプロデューサー或いはディレクター

○ 帰国研修員に期待される役割：

日本で得た知識や技術を活用して自国においてより効果的な番組を制作することにより、放送事業の発展に貢献し、ひいては人々の生活・教育水準の向上に寄与する。

○ コースの目標：

1. テレビジョン番組制作にかかる基礎的な知識や技術を習得する。
2. わが国の放送機関（NHK）におけるテレビジョン番組制作のいくつかの主な基礎的手法・技法の特徴を理解する。
3. テレビジョン番組のあり方を考え、番組制作者としての自覚を深める。

○ 主な研修内容：

(1) 講義 (カントリーレポート発表を含む)

番組制作の基本についての講義やNHKの制作した代表的なテレビジョン番組の視聴、各研修員によるカントリーレポートの発表を通じ、テレビジョン番組制作の一般的概念、位置付けを理解し、より効果的なテレビジョン番組の在り方を考察する。また日本の放送分野の最新技術を紹介する。

(2) 実習

3グループに分かれ、各グループで1本ずつドキュメンタリー番組（20分程度）の制作実習をする。こうした体験学習を通して番組制作の基本的な手順や手法を習得する。

(3) 見学

講義及び実習を保管するために、NHK放送センターその他関連機関を見学し、関係者と意見交換する。

○ ニーズの継続性／変化：

近年開発途上諸国において人々の生活・教育水準の向上を図る為に様々な情報の普及が求められる中、テレビジョンは他のマスメディアと比べ、直接的に人々の視覚・聴覚に訴える最も効果的な道具であり、その番組の制作は重要である。今後はデジタル化により著しい技術革新が進むものと予測され、番組制作に係る人材の育成は急務である。

○ 研修実施機関

(財) NHK放送研修センター
NHK

○ 実績

昭和38年度：「教育放送番組」として開始、後に「教育テレビ番組」と改称

昭和59年度：「教育テレビジョン番組（基礎）」

「教育テレビジョン番組（上級）」

と2コースに分け、改称及び内容変更

平成3年度：「テレビ番組制作（総合）」

「テレビジョン社会教育番組」

と改称及び内容変更

平成5年度：「テレビジョン番組制作」

「テレビジョン社会教育番組II」

と改称及び内容変更

「テレビジョン番組制作」コースは昭和38年度から平成10年度までで432名

「テレビジョン社会教育番組II」コースは昭和59年度から平成10年度までで146名

計 578 名

Outline of the Group Training Course

- Course Name:** TELEVISION PROGRAMME PRODUCTION
- Duration:** Beginning of July - Middle of September (2.5 months)
- Number of Participants** 10
- Language** English
- Purpose** The purpose of this course is to introduce the production techniques and methods of the TV programs to the producers and directors who are engaged in TV programme production.
The participants are expected to renew their appreciation of the importance of TV, and to acquire necessary programme production techniques such as planning ability, manner of presentation, etc.
In addition, the state-of-the-art technologies and the future prospects of the broadcasting field are also introduced.
- Target Group:** TV producers or directors who have been engaged in producing television programmes in the public or private TV broadcasting center.
- Objective:** Through the course, participants are expected :
(1) to acquire the basic knowledge and skills for TV programme production (focused on programme planning / structuring / script writing)
(2) to learn the fundamental methods of TV program production adopted by a Japanese broadcaster through practical training
- Training Institution:**(1) NHK Communications Training Institute (NHK-CTI)
NHK-CTI was established in 1985 with aim of training NHK employees, as well as personnel of other enterprises related to broadcasting. It also shares its know-how of communication skills to the public. It implements the business in full cooperation with NHK.
(2) NHK Broadcasting Center
NHK is the sole public broadcasting organization based upon the Broadcast Law. NHK is the largest broadcaster in Japan.

Outline of the Group Training Course

Course Name:	TELEVISION SOCIAL EDUCATION PROGRAMME II
Duration:	Middle of January - Middle of March (2 months)
Number of Participants	10
Language	English
Purpose	<p>The purpose of this course is to introduce the production techniques and methods of the educational TV programs to the producers and directors who are engaged in educational and socially informative TV programme production.</p> <p>The participants are expected to renew their appreciation of the importance of education by TV, and to acquire necessary programme production techniques such as planning ability, manner of presentation, etc.</p> <p>In addition, the state-of-the-art technologies and the future prospects of the broadcasting field are also introduced.</p>
Target Group:	TV Producers or directors who have been engaged in producing television programmes in the public or private TV broadcasting center.
Objective:	<p>Through the course, participants are expected :</p> <p>(1) to acquire the basic knowledge and skills for TV social education programme production (focused on programme planning / structuring / script writing)</p> <p>(2) to learn the fundamental methods of TV social education programme production adopted by a Japanese broadcaster through practical training</p>
Training Institution:	<p>(1) NHK Communications Training Institute (NHK-CTI) NHK-CTI was established in 1985 with aim of training NHK employees, as well as personnel of other enterprises related to broadcasting. It also shares its know-how of communication skills to the public. It implements the business in full cooperation with NHK.</p> <p>(2) NHK Broadcasting Center NHK is the sole public broadcasting organization based upon the Broadcast Law. NHK is the largest broadcaster in Japan.</p>

2. 帰国研修員リスト (定着状況) *1991年度以降を対象とする。☆印は今回面談者

来日 年度	名前	来日時		現在		備考
		役職	所属	役職	所属	
テレビジョン番組制作						
1 ☆	MR.ADIKARI M.C.NANASINGHE	PROGRAMME PRODUCER	EDUCATIONAL PROGRAMME DIV. SRI LANKA RUPAVAHINI TV CORPORATION	ASSISTANT DIRECTOR	GENERAL PROGRAMME DIV. SRI LANKA RUPAVAHINI TV CORPORATION	
2	MR.LORONSU H.S.R.DE SILVA	ELECTRONIC EDITOR AND CUM PRODUCER	AUDIO VISUAL DIVISION MINISTRY OF FINANCE	来日時と同じ	来日時と同じ	
3	MS.ERIN WTEKOON	PROGRAMME PRODUCER	GENERAL PROGRAMME DIV. SRI LANKA RUPAVAHINI TV CORPORATION	来日時と同じ	来日時と同じ	
4 ☆	MR.H.G.DARASHANA PIYARATHNA	PROGRAMME PRODUCER	EDUCATIONAL PROGRAMME DIV. SRI LANKA RUPAVAHINI TV CORPORATION	来日時と同じ	来日時と同じ	
5 ☆	MR.G.CHANDANA SENEVIRATHNE	PRODUCTION ASSISTANT	EDUCATIONAL PROGRAMME DIV. SRI LANKA RUPAVAHINI TV CORPORATION	PROGRAMME PRODUCER	来日時と同じ	
テレビジョン社会教育番組II						
1 ☆	MR.GAMINI D.ABEYKOON	PROGRAMME PRODUCER	EDUCATIONAL PROGRAMME DIV. SRI LANKA RUPAVAHINI TV CORPORATION	Dy.DIRECTOR	GENERAL PROGRAMME DIV. SRI LANKA RUPAVAHINI TV CORPORATION	
2 ☆	MR.ANURA KODIPPILI THANTILAGE	PROGRAMME PRODUCER	EDUCATIONAL PROGRAMME DIV. SRI LANKA RUPAVAHINI TV CORPORATION	SENIOR PROGRAMME PRODUCER	来日時と同じ	
3 ☆	MS.SUNANDA DAMAYANTHI HEITTIARACHCHI	PROGRAMME PRODUCER	EDUCATIONAL PROGRAMME DIV. SRI LANKA RUPAVAHINI TV CORPORATION	SENIOR PROGRAMME PRODUCER	ENTERTAINMENT AND YOUTH PROGRAMME DIV. SRI LANKA RUPAVAHINI TV CORPORATION	
4 ☆	MR.UMARLEBBE YAKOOB	PROGRAMME PRODUCER	GENERAL PROGRAMME DIV. SRI LANKA RUPAVAHINI TV CORPORATION	来日時と同じ	ENTERTAINMENT AND YOUTH PROGRAMME DIV. SRI LANKA RUPAVAHINI TV CORPORATION	
5 ☆	MR.K.D.JAYASRI WIJAYARATNE	PROGRAMME PRODUCER	GENERAL PROGRAMME DIV. SRI LANKA RUPAVAHINI TV CORPORATION	来日時と同じ	COMMERCIAL DIV. SRI LANKA RUPAVAHINI TV CORPORATION	

<パキスタン>

来日 年度	名 前	来 日 時		現 在		備 考
		役 職	所 属	役 職	所 属	
テレビジョン番組制作						
1 ☆	MR.SAJJAD AHMED	PROGRAMME PRODUCER	INFORMATION DIV. PAKISTAN TELEVISION CORPORATION LIMITED	来日時と同じ	来日時と同じ	
2 ☆	MR.BASHARAT KHAN	PROGRAMME PRODUCER	PROGRAMMES DEPT PAKISTAN TELEVISION CORPORATION LIMITED	来日時と同じ	CENTER LAHORE PAKISTAN TELEVISION CORPORATION LIMITED	
テレビジョン社会教育番組組II						
1	MS.SURRIYA ANWAR KHAN	PRODUCER	INSTITUTE OF EDUCATIONAL TECHNOLOGY ALLAMA IQBAL OPEN UNIVERSITY	---	---	死去
2 ☆	MS.ASGHAR ALI	PROGRAMME PRODUCER	AUDIO VISUAL COMMUNICATIONS N.A.R.C. PAKISTAN AGRICULTURE RESEARCH COUNCIL ISLAMABAD	来日時と同じ	来日時と同じ	
3	MR.QURESHI FARHATULLAH	PROGRAMME PRODUCER	PROGRAMMES DEPT PAKISTAN TELEVISION CORPORATION LIMITED	来日時と同じ	来日時と同じ	
4	MR.ZAFAR IQBAL ASIF	ASSISTANT PRODUCER	INSTITUTE OF EDUCATIONAL TECHNOLOGY ALLAMA IQBAL OPEN UNIVERSITY	---	---	失踪
5 ☆	MR.JEHANZEB KHAN	PROGRAMME PRODUCER	CURRENT AFFAIR PAKISTAN TELEVISION CORPORATION LIMITED	来日時と同じ	CENTER QUETTA PAKISTAN TELEVISION CORPORATION LIMITED	
6 ☆	MR.SYED QAISER NAQI IMAM	PROGRAMME PRODUCER	PROGRAMMES DEPT PAKISTAN TELEVISION CORPORATION LIMITED	来日時と同じ	来日時と同じ	

3. 主要面談者リスト

<スリ・ランカ>

在スリ・ランカ日本国大使館

Ms. TOMOKO NODA Attache

大蔵・企画省 (Ministry of Finance and Planning, Department of External Resources)

Ms. R.V.NANAYAKKARA Director

Mr. A. Sooriyagoda Dy.Director

郵便・通信・メディア省 (Ministry of Posts,Telecommunication and Media)

Mr. Seneviratne Asst.Director

スリ・ランカ／ルパバヒニテレビ局 (Sri Lanka Rupavahini Corporation (SLRC))

Mr. Dew Gunasekera Chairman

Mr. Laxman Perera Director General

Mr. Amal G. Punchihewa Dy.Director General (Engineering)

スリ・ランカテレビ研修所 (Sri Lanka Television Training Institute (SLTTI))

Mr. Amal G. Punchihewa Director

スリ・ランカ公開大学 (Educational Technology Division,The Open University of Sri Lanka)

Mr. K.H.Wanigasundera Media Officer

エカラ短波送信所 (Ekala Short -wave Transmitting Station)

Mr. L.S.Abeydheera Chief Engineer

JICAスリ・ランカ事務所

狩野 良昭 所長

鈴木 康次郎 次長

永石 雅史 所員

S.M.Punchibanda 所員

<パキスタン>

在パキスタン日本国大使館

Mr. Toshiyuki IWADO

Mr. NOJIRI

参事官

一等書記官

財政・経済省 (Ministry of Finance and Economic Affairs, Economic Affairs Division)

Mr. S.M.Hasan Zaidi

Deputy Secretary

情報・放送省 (Ministry of Information and Broadcasting)

Mr. Ahsan Yousaf

Director General (I.P.Wing)

Ms. Tahira Zia

Director

Mr. Zafar - ur - Hassan

Dy.Director (PBC)

Mr. S.Qaim Hussain Naqui

Assistant Director (Trg.)

(Mr. M.Yaqoob Khan

Sr.Resource Person PTV)

パキスタンテレビ局 (Pakistan Television Corporation (PTV))

Mr. Yousaf Baig Mirza

Managing Director

Mr. Muhammad Hanif Ansari

Manager Training &Delegation

Mr. Muhammad Kamil

Controller Engineering

パキスタン教育テレビ局 (Educational Television Center (PTV2))

Mr. Khawaja Najam ul Hasan

General Manager

Mr. Malik Afzal

Admini Plan Manager

Mr. Khaliq Toor

Engineer Manager

Mr. Aftab Iscan

Program Manager

PTVアカデミー (PTV Academy)

Mr. Nsir Malik

Controller Production Training

Mr. Shahab Noorani

Controller Engineering

アラマイクバル公開大学 (Institute of Educational Technology Allama Iqbal Open University)

Mr. Javed Mahmood Kasuri

Director (IET)

JICAパキスタン事務所

中川 和夫

所長

竹内 和樹

所員

Haroon - ur - Rashid Rana

所員

4. クエストヨネア

<スリ・ランカ>

1. 技協窓口省庁／関係省庁

(1) 技協窓口省庁

大蔵・企画省

Ministry of Finance and Planning, Department of External Resources

(2) 関係省庁

郵便・通信・メディア省

Ministry of Posts, Telecommunication and Media ← 未回収

2. 研修員所属機関

スリ・ランカ／ルパバヒニテレビ局

Sri Lanka Rupavahini Corporation (SLRC)

3. 帰国研修員 - 集計 - 10名分／10名中

(1) スリ・ランカ／ルパバヒニテレビ局

Sri Lanka Rupavahini Corporation (SLRC) 9名

(2) 大蔵・企画省

Ministry of Finance and Planning 1名

<パキスタン>

1. 技協窓口省庁／関係省庁

(1) 技協窓口省庁

財政・経済省

Ministry of Finance and Economic Affairs, Economic Affairs Division

(2) 関係省庁

情報・放送省

Ministry of Information and Broadcasting ← 未回収

2. 研修員所属機関

パキスタンテレビ局

Pakistan Television Corporation Ltd. (PTV)

3. 帰国研修員 - 集計 - 5名分／8名中

(1) パキスタンテレビ局

Pakistan Television Corporation Ltd. (PTV) 5名

(2) 国立農業研究センター

National Agricultural Research Center 1名

(3) アラマイクバル公開大学 1名死亡、1名失踪

Institute of Educational Technology Allma Iqbal Open University)

1. 技術協力窓口省庁

<スリ・ランカ>

機関名 : 大蔵・企画省
部署名 : External Resources Department (ERD)
役職 : Director / TA Division
氏名 : Ms. R. V. Nanayakkara

ERDは、スリ・ランカへの二ヶ国間あるいは多国間による外資や技術協力支援の担当窓口である。基金額の決定や同意についてドナー国との交渉を行っており、ドナー国によるプロジェクトの監督履行に関する助言は重要な職務の一つである。

I. 貴機関の開発計画について

(テレビ番組制作分野の開発計画については直接関係ないため回答なし。)

II. 研修員の選考について

1. テレビジョン番組制作及びテレビジョン社会教育番組IIのG.I.をどのような機関に配布しますか。

スリ・ランカ/ルパバヒニテレビ局 (SLRC)、インディペンデントテレビジョンネットワーク等郵便・通信・メディア省の管轄下にある機関。

2. 上記機関を選んだ理由を述べて下さい。

このタイプの研修は上記の機関の下に活用されており、また上記機関は毎年の要望調査でも本研修を要求しているため。

3. どのような方法 (試験、面接等) で上記各機関で推薦された研修参加候補者を選考しますか。

各機関による選考手順に従っている。

4. 研修参加候補者の選考には通常どのくらい期間がかかりますか。

4週間

5. 貴国では研修参加者に研修を通してどのような知識や技術を習得することを期待しますか。

研修参加候補者の所属する各機関が詳しく回答する。

III. 研修コースの評価について

1. 貴国では研修員の帰国後、研修成果の評価を行っていますか。

はい (○) / いいえ ()

評価は帰国研修員の所属する各機関で行われる。

2. コース概要に記されていた到達目標と目的は貴国の要望を満たしていますか。

はい (○) / いいえ ()

3. 貴国の要望を満たすために上記の到達目標と目的を変更する必要がありますか。

各機関の方が詳しく回答できると思われる。

4. 貴国の本分野の発展、向上にとってこれらの研修コースは効果的ですか。

はい (○) / いいえ ()

詳細については各機関の方が詳しく回答できると思われる。

5. 帰国後、プロデューサー、あるいはディレクターとして勤務している帰国研修員の現状、定着率を述べて下さい。

各機関が回答する。

6. 研修コースについて貴国が日本に要望、期待する事があれば述べて下さい。
(目標、期間、研修内容について等。)

評価は関係機関で行われるべきである。

IV. その他

テレビ番組制作分野に関する研修コースや、その他技術協力に対する日本への要望がありましたら、以下に述べて下さい。

(例：G.I.表記方法、帰国研修員のアフターケア、同窓会等)

技術協力の要望に応じて、1つの研修コースに2人以上の研修参加候補者の受入を考慮してほしい。

詳細は各機関に相談して下さい。

1. 技術協力窓口省庁

<パキスタン>

機関名 : 財政・経済省
部署名 : Economic Affairs Division (EAD)
役職 : Section Officer
氏名 : Dr. Rashid Manzoor

EADは、パキスタンへの外資経済支援実施のための、ドナー国とパキスタン政府各省庁、部、課間との調整役を担っている。

I. 貴機関の開発計画について

(テレビ番組制作分野の開発計画については直接関係ないため回答なし。)

II. 研修員の選考について

1. テレビジョン番組制作及びテレビジョン社会教育番組IIのG.I.をどのような機関に配布しますか。

- ・情報メディア開発省
- ・パキスタンテレビ局
- ・教育省
- ・アラマイクバル公開大学

2. 上記機関を選んだ理由を述べて下さい。

上記の機関がテレビ番組制作に関わっているため。

3. どのような方法(試験、面接等)で上記各機関で推薦された研修参加候補者を選考しますか。

研修参加候補者の選考の際、以下の基準を考慮に入れる。

研修参加候補者は； 1) 2、3年の経験があること
2) 十分な教育を受けていること
3) JICAによる基準を満たしていること。

4. 研修参加候補者の選考には通常どのくらい期間がかかりますか。

1、2ヶ月

5. 貴国では研修参加者に研修を通してどのような知識や技術を習得することを期待しますか。

無回答

III. 研修コースの評価について

1. 貴国では研修員の帰国後、研修成果の評価を行っていますか。

はい () / いいえ ()

無回答

2. コース概要に記されていた到達目標と目的は貴国の要望を満たしていますか。

はい (○) / いいえ ()

3. 貴国の要望を満たすために、上記の到達目標と目的を変更する必要はありますか。

無回答

4. 貴国の本分野の発展、向上にとってこれらの研修コースは効果的ですか。

はい (○) / いいえ ()

5. 帰国後、プロデューサー、あるいはディレクターとして勤務している帰国研修員の現状、定着率を述べてください。

情報・放送省とパキスタンテレビ局がこの質問に詳しく答えることができる。

6. 研修コースについて貴国が日本に要望、期待する事があれば述べて下さい。
(目標、期間、研修内容について等。)

無回答

IV. その他

テレビ番組制作分野に関する研修コースや、その他技術協力に対する日本への要望がありましたら、以下に述べて下さい。

(例：G.I.標記方法、帰国研修員のアフターケア、同総会等)

無回答

2. 研修員所属機関 <スリ・ランカ>

機関名 : スリ・ランカ／ルババヒニテレビ局 (SLRC)
部署名 : Chief Executive Officer
役職 : Director General / Dy. Director General
氏名 : Mr. Laxman Perera / Mr. Amal G. Punchihewa

SLRCはスリ・ランカの国営テレビ局であり、ニュース、教育、娯楽番組をスリ・ランカの全ての視聴者のために制作している。SLRCは幅広い受信可能地域を保持しており、国民の約90%が番組の受信が可能である。

1. 貴機関の開発計画について

貴機関の発展／向上（特に人材開発あるいは教育制度について）のための政策、方針とプロジェクトを詳しく述べて下さい。

1. 過去5年間を含めた現状

SLRCは人材開発のための研修部門を組織し、多くの職員に様々な研修を提供すべく地元研修のための資金配分を増やした。

SLRCは放送分野の満足な業務を行うために継続的な研修と教育の必要性を認識している。

2. 主要な問題点とその対策

主要な問題はSLRCが職員に提供できる研修の機会についてである。即効性のある研修、多くの職員に対する研修の必要性を感じているが、人材開発のための研修プログラムとその後援者を探すのに非常に苦勞している。

3. 将来計画

SLRCはより多くの研修の機会を得るために、JICAやNHK等の機関とのつながりを強化しようと計画している。JICAと協力して今年から第三国研修の開始を計画している。

また、SLRCはスリ・ランカテレビ研修研究所 (SLITI)、国立電子メディア研修所とも共同で国内研修プログラムの設立を目指している。

II. 研修員の選考について

1. 貴機関はテレビジョン番組制作及びテレビジョン社会教育番組IIのG.I.をどの機関から得ましたか。

大蔵・企画省、Department of External Resourcesから郵便・通信・メディア省を通じて得た。

2. 貴機関ではこれらの研修コースについて、どのような方法で貴方の部下に知らせますか。

内部の回覧によって紹介され、研修参加候補者からの応募を募る。

3. どのような方法（試験、面接等）で研修参加候補者を選考しますか。

研修参加候補者は、面接の結果及びSLRCでの業務成績他をもとに選考される。また研修参加候補者の、日本での研修の成果を業務に適用させる能力についても考慮する。

4. 研修参加候補者の選考には通常どのくらいの期間がかかりますか。

SLRCから郵便・通信・メディア省を通じて大蔵・企画省、Department of External Resourcesに提出するまでに3日から14日。

5. 貴機関では、研修参加者に研修を通してどのような知識や技術を習得することを期待しますか。

SLRCでは研修参加者に、コミュニケーションのための電子メディアの知識を得る事、すなわちメッセージの送信のためのコミュニケーション技術、番組制作のための新技術と資機材の知識、番組内容の新しい発表方法の知識を得る事を期待する。

Ⅲ. 研修コースの評価について

1. 貴機関では研修員の帰国後、研修成果の評価を行っていますか。

はい (○)

いいえ ()

評価は2つの方法で行われる。

(1) 帰国研修員が研修で学んだ事、プログラムの活用性と長所について書いたりレポートの提出によって評価をしている。

(2) 帰国研修員が研修前と研修後に制作した番組を比較することで評価している。

研修後に彼等が学んだことを適用してから、彼等の昇進や勤務評価はチェックされる。

2. コース概要に記されていた到達目標と目的は貴機関の要望を満たしていますか。

はい (○)

いいえ ()

3. 貴機関の要望を満たすために上記の到達目標と目的を変更する必要がありますか。

はい ()

いいえ (○)

4. 貴機関の発展、向上にとってこれらの研修コースは効果的ですか。

はい (○)

いいえ ()

これらの研修プログラムはSLRCの発展と向上に大変有益である。研修では番組を迅速に、綿密に計画・制作していた。SLRCでは重要な番組の計画及び制作を研修に参加したプロデューサーに任せ、その番組のできばえ評価は非常に良かった。SLRCではグループの作業を通じてこうした知識や技術を他の職員に広めている。

5. 帰国後、プロデューサー、あるいはディレクターとして勤務している帰国研修員の現状、定着率を述べて下さい。

SLRCでは、帰国研修員10名中9名までがSLRCのプロデューサーとして活躍している。

6. 研修コースについて貴機関が日本に要望、期待する事があれば述べて下さい。(目標、期間、研修内容について等。)

SLRCでは番組制作及び制作技術の分野においてより多くの研修の機会を必要としている。期間は4週間から8週間で、これら研修コースとはまた異なる研修内容、深さのものが適当と思われる。

IV. 研修コース内容の適用について

1. 帰国研修員の研修成果の適用によって貴機関は何か影響をうけましたか。
はい (○) いいえ ()

研修員が実習で得た技術と知識は番組の質を向上させるために活用されている。

2. 貴機関では帰国研修員の得た知識と技術をどのように活用していますか。具体例を挙げて下さい。

グループ作業をすることでまわりの職員に知識を広める。
また帰国研修員には重要な番組制作を任せることで活用している。

3. 貴機関では帰国研修員が得た知識や技術の適用効果を向上するための計画はありますか。
はい (○) いいえ ()

基礎的な研修を終えた研修員の上級研修への参加。

V. 日本以外の国での研修について

1. 貴機関では日本以外の他の援助国や国際機関による類似の当該分野関連研修に参加した職員はいますか。

はい (○) いいえ ()

研修年度 : 1996、1997、1998年
研修期間 : 6ヶ月
研修名 : 社会問題についての研修
研修目標 :
研修地 : 都市名 ベルリン 国名 ドイツ、オランダ
研修計画協力機関 : ドイツ・オランダ文化プログラム

2. 他の援助国での研修と比べて日本での研修を改善するための提案やコメントがありますか。

2カ国の異なる状況にいる2人のプロデューサー間の交換プログラム。

VI. その他

テレビ番組制作分野に関する研修コースや、その他技術協力に対する日本への要望がありましたら、以下に述べて下さい。

(例 : G.I. 表記方法、帰国研修員のアフターケア、同窓会等)

2. 研修員所属機関 <パキスタン>

機関名 : パキスタンテレビ局 (PTV)
部署名 : Admin & Personnel Division
役職 : Manager, Training & Delegation
氏名 : Mr. Muhammad Hanif Ansari

PTVはパキスタンの国営テレビ局であり、情報、教育、娯楽番組を制作し、視聴者に供給している。

また、本部署は国内外での研修やワークショップ等の計画手配を行っている。

1. 貴機関の開発計画について

貴機関の発展／向上（特に人材開発あるいは教育制度について）のための政策、方針とプロジェクトを詳しく述べて下さい。

1. 過去5年間を含めた現状

無回答

2. 主要な問題点とその対策

無回答

3. 将来計画

無回答

II. 研修員の選考について

1. 貴機関はテレビジョン番組制作及びテレビジョン社会教育番組ⅡのG.I.をどの機関から得ましたか。

情報・メディア開発省より得た。

2. 貴機関ではこれらの研修コースについて、どのような方法で貴方の部下に知らせますか。

管理スタッフ業務指示システムにより、それぞれのコースに適切と思われる人材がいる課の課長から推薦を受ける手順をとっている。研修の条件を満たした研修参加候補者は情報・メディア開発省を通して財政経済省 Economic Affair Division に送られる。

3. どのような方法（試験、面接等）で研修参加候補者を選考しますか。

年功序列による地位と以下に述べる資格を満たす者を主に書類審査で選出する。

- 1) パキスタンテレビの社員であること。
- 2) パキスタンテレビでの職歴が3年以上ある者。
- 3) 過去3年間における勤務成績が良好な者。
- 4) 長期コースの場合は過去3回の勤務レポートのうち2回以上のレポートにおいて中以上の成績を得ている者。
- 5) 健康な者。
- 6) 長期コースの場合は年齢50歳以下の者。

4. 研修参加候補者の選考には通常どのくらいの期間がかかりますか。

各コースの締め切り日による。

5. 貴機関では、研修参加者に研修を通してどのような知識や技術を習得することを期待しますか。

テレビ番組制作における最新の開発と技術。

IV. 研修コース内容の適用について

1. 帰国研修員の研修成果の適用によって貴機関は何か影響を受けましたか。

はい ()

いいえ ()

無回答

2. 貴機関では帰国研修員の得た知識と技術をどのように活用していますか。具体例を挙げて下さい。

無回答

3. 貴機関では帰国研修員が得た知識や技術の適用効果を向上するための計画がありますか。

はい ()

いいえ ()

無回答

V. 日本以外の国での研修について

1. 貴機関では日本以外の他の援助国や国際機関による類似の当該分野関連研修に参加した職員はいますか。

はい ()

いいえ ()

研修年度 :

研修期間 : 年 月 日

研修名 :

研修目標 :

研修地 : 国名 都市名

研修計画協力機関 : AIBD, IPTAR/マレーシア、ABU/マレーシア

Deutsche Welle AIMC/シンガポール・ドイツ

SLRC/スリランカ

CBA/ロンドン・シンガポール

2. 他の援助国での研修と比べて日本での研修を改善するための提案やコメントがありますか。

無回答

VI. その他

テレビ番組制作分野に関する研修コースや、その他技術協力に対する日本への要望がありましたら、以下に述べて下さい。

(例：GI 表記方法、帰国研修員のアフターケア、同窓会等)

3. 帰国研修員 - 集計 10名分 - <スリ・ランカ>

I. 職歴と業務内容について

1. 帰国後の職務を述べて下さい。
(現職については、添付資料2.「帰国研修員リスト(定着状況)」参照。)

II. 研修コースの評価について

1. コース概要に記された到達目標と目的は貴方の要望を満たしていますか。
はい(10人) いいえ(人)
2. 貴方の要望を満たすために上記の到達目標と目的を変更する必要がありますか。
はい(人) いいえ(10人)
3. 研修コースは貴方の期待または目的を満たしましたか。

1) 講義

はい(10人) いいえ(人)

- ・講義と教授方法は明解で正確だった。(91番組制作)
- ・テレビ番組制作のための新しいシステムと方法を知るために大変有効であった。(93社会教育番組Ⅱ)
- ・知識と技術が得られた。(98番組制作)
- ・技術システムと番組制作の最新の情報を得るのに大変意義があった。(95社会教育番組Ⅱ)
- ・十分な事実と効果的な発表であった。(91社会教育番組Ⅱ)
- ・講義からテレビ放送の最新情報について学べた。(96社会教育番組Ⅱ)
- ・講義の時間割当が多すぎた。(93番組制作)

2) 実習

はい(10人) いいえ(人)

- ・実習で使われた資機材は我々が自国で使っているものと類似していた。(91番組制作)
- ・実習は適確な番組計画、構成、台本についてだったので大変よかった。(93社会教育番組Ⅱ)
- ・日本での実習中、NHKの番組制作システムについて学ぶ素晴らしい機会があった。(95社会教育番組Ⅱ)

- ・番組制作に重要な事を学ぶ一番良い方法だった。分かりやすく完璧なワークショップであった。(91社会教育番組Ⅱ)
- ・実習を通じて高度なテレビ技術を学んだ。(96社会教育番組Ⅱ)
- ・研修員が重要な知識を習得できた。(93番組制作)

3) 見学

はい(9人)

いいえ(1人)

- ・見学を通して日本のテレビ通信システムを学ぶ事が出来た。(91番組制作)
- ・研修期間中NHKやその地方局を訪れ、NHKの現場のやり方を見学できたのは素晴らしい経験だった。また研修旅行は日本の生活様式と歴史を知るために有益だった。(93社会教育番組Ⅱ)
- ・研修旅行中、テレビ番組制作だけでなく、日本の重要組織への訪問で日本人の生活様式も見学し、今まで知らなかった多くの情報を得た。(95社会教育番組Ⅱ)
- ・業務手腕向上のための新しいアイデアを得た。(91社会教育番組Ⅱ)
- ・見学を通して歴史的に重要な場所の見学が出来た。(96社会教育番組Ⅱ)
- ・見学中に得られた知識は私の仕事に有効に適用することができた。(93番組制作)

4. 今後、研修コースの中でどのような内容がより強調されるべき、あるいは新しく紹介されるべきでしょうか。

- ・ポストプロダクションの技術(91番組制作)
- ・番組発表の様々な方法と新しい制作技術(93社会教育番組Ⅱ)
- ・様々な種類の照明システムと映像処理を含むスタジオ制作の実践的な知識(95番組制作)
- ・これまで使っていたものが組み合わされて改善された技術システム。我々がより良い経験と新しい技術をもつプロデューサーからその知識を見て得る機会があればよい。(98番組制作)
- ・野生生物番組の制作のための新しい技術の紹介と、新しい資機材の正しい使用法(92社会教育番組Ⅱ)
- ・研修内容は実習を優先させるべき。(95社会教育番組Ⅱ)
- ・グラフィックと最先端のポストプロダクション制作施設の紹介、最先端の編集資機材を扱うチャンス、実習を増やす事。(91社会教育番組Ⅱ)
- ・カメラ技術、ペイントボックス、デジタル編集、コンピューターグラフィックス(96番組制作)
- ・実習の内容を重要視するべき。(96社会教育番組Ⅱ)

- ・より多くの実習を取り入れるべき。番組企画は現場で行われたほうが良い。(93番組制作)

5. 研修コースについて貴方が日本に要望、期待する事があれば述べて下さい。
(例：目標、期間、研修内容について等。)

- ・研修期間の延長。
- ・スタジオプロダクション技術を追加する。
- ・コースでのマルチメディアコンピュータの使用を追加する。
(91番組制作)
- ・個人的には、ビジネス、貿易、経済の分野における研修を希望する。
(93社会教育番組Ⅱ)
- ・研修期間の延長が可能ならば、日本はどのように物質的にも文化的にも発展してきたのかといった、プロデューサーに必要なより多くの実践的な知識と経験を得る事ができ、更に良いだろう。(95番組制作)
- ・我々の所持するビデオライブラリーはNHK-CIIと比べてあまり良くないので、もし良いドキュメンタリー番組を送ってもらえたら自由時間に視聴する事ができ、知識を向上できる。(98番組制作)
- ・日本政府は将来、帰国研修員にフォローアップ研修と上級コースを提供すべき。
- ・テレビ番組制作にかかわる若い世代を研修することと、研修員の年齢制限を排除することを考慮すべき。(95社会教育番組Ⅱ)
- ・21世紀に適した新技術、方法を使った高度な番組制作(96番組制作)
- ・帰国研修員のための上級レベルのフォローアップコースを紹介してほしい。又、テレビ放送にかかわる若い世代にもより多くの研修コースを提供してほしい。(96社会教育番組Ⅱ)
- ・ひとつ以上番組制作実習に取り組むために研修期間を延長し、各人毎に異なるテーマで実施すべき。日本や日本の人々に多く触れるため、研修旅行期間を延長すべき。
より多くの結論や対処方法や活発な活動、意見交換等を得るという利益のために、各国から1名づつだけ研修員を選ぶこと。(91社会教育番組Ⅱ)
- ・研修内容についての全ての分野で、研修員がより多くの実施研修に参加できるように、講義は最低限に押さえるべき。研修期間は少なくとも4ヶ月間はあるべき。(93番組制作)

III. 研修コース内容の適用について

1. 帰国後、研修コース（講義、実習、見学等）で経験し、得たことを貴方の職務で適用しましたか。

はい（10人）

いいえ（人）

1) 研修コースで得たどのような知識や技術を職務に適用しましたか。

- ・適確な番組リサーチ方法
- ・タイムスケジュールの実務経験
- ・日本の番組制作の手順（'91番組制作）
- ・特に、番組計画、台本作成、編集と音声録音の仕方（'93社会教育番組Ⅱ）
- ・台本の完璧な作成法とその効果的な視覚映像への利用法（'95番組制作）
- ・イエローカードシステム、VTR編集リストを取り入れ、ドキュメンタリー番組の制作に大変有効であった。（'98番組制作）
- ・台本作成、編集方法（'92社会教育番組Ⅱ）
- ・講義、実習、見学の内容。（'95社会教育番組Ⅱ）
- ・スタジオ実習、台本制作方法、情報収集の方法（'91社会教育番組Ⅱ）
- ・研修で得た編集と企画の技術を生放送番組で適用した。（'96社会教育番組Ⅱ）
- ・音声吹き替えシステム、新編集システム、番組企画の新しい方法や、番組制作期間計画法等、研修で得た知識は職務履行の中で有用されている。（'93番組制作）

2) 上記で述べた知識や技術の貴方の職務での適用の仕方を述べて下さい。

- ・研修で得た知識を自分の番組に適用し、又、グループリーダーとして部下のプロデューサーにアドバイスをした。（'91番組制作）
- ・以前から計画、台本作成、番組制作の手順には慣れていたが、日本での研修は我々に、同じ仕事を適確、体系的にするための数えきれない程の知識を与えた。特に研修で受けたオフライン編集の仕方の方法についてである。番組全体の主テーマ、アイディアは決定された後でもいつでも変えられることでよりよい理解が得られる。このことは新しい経験であり、帰国後それを適用し、成功した。（'93社会教育番組Ⅱ）
- ・日本政府より与えられた新技術の資機材の使用。（'95番組制作）
- ・特にドキュメンタリー番組を制作しているが、イエローカードシステムは制作準備に非常に重要である。これを取り入れる事により、番組制作の編集を何度も繰り返す必要がなくなった。又、VTR編集リストは番組制作で特殊効果を使用するとき大変重要である。日本とは異なりスリ・ランカではこの技術はプロデューサーの責任であるため、このシステムは非常に価値のあるものである。（'98番組制作）

- ・研修コースで得た新しい知識と技術は調査、制作、編集といった一連の全ての番組制作過程において役立った。（'92社会教育番組Ⅱ）
- ・幾つかの自分の番組制作で研修で得た知識を適用した。そのひとつの例として、研修コースで広島原爆についての講義があったが、帰国後にこの内容について研修で得た制作方法と情報を適用して番組制作をし、スリランカの視聴者から良い感想を得た。（'95社会教育番組Ⅱ）
- ・研修コースでの実習等はS L R Cでの児童／教育番組の制作で、自分が制作に従事し、又、制作過程で部下を指導する時に適用している。（'91社会教育番組Ⅱ）
- ・NHKでの編集システムは我が国のシステムとは違ったので、得た知識を自分のいくつかの番組の中で活用している。（'96社会教育番組Ⅱ）
- ・映像音声システムを調和させる新しい方法を適用した。（'93番組制作）

2. 貴方の職務に適用するのに最も有効な研修内容は何ですか。

- ・時間割り（タイムテーブル）を維持すること（'91番組制作）
- ・計画、台本、編集方法（'93社会教育番組Ⅱ）
- ・編集と台本作成の方法（'95番組制作）
- ・イエローカードシステム、VTR編集リスト、Y a s u m a 教授の講義（'98番組制作）
- ・編集方法（'92社会教育番組Ⅱ）
- ・講義と実習（'95社会教育番組Ⅱ）
- ・台本制作（'91社会教育番組Ⅱ）
- ・台本制作（'96番組制作）
- ・実習（'96社会教育番組Ⅱ）
- ・番組制作の期間と制作企画の新しい方法。（'93番組制作）

3. 貴方の職務に適用するのに有効でない研修内容がありますか。

はい（1人）

いいえ（9人）

- ・撮影システム、音声録音システム、編集システムは完全には適用できない。（'96社会教育番組Ⅱ）

4. 貴方の職務で、研修コースで得た知識や技術を適用するにあたっての問題点に関する以下の質問にお答え下さい。

1) 研修成果の適用にあたって上司は理解や協力をしましたか。

はい (7人)

いいえ (3人)

2) 研修成果を適用するために十分な資機材を供給されましたか。

はい (3人)

いいえ (6人)

3) 研修成果を適用するために十分な人材を供給されましたか。

はい (4人)

いいえ (6人)

4) 研修成果適用にあたって何か問題があれば述べて下さい。

- ・SLRCの多くの管理職レベルの人材は実務経験不足であるため、番組制作方法について理解しない。(91番組制作)
- ・スリ・ランカでは大勢の編集者(エディター)がいるが、実際に編集者としての仕事を行っている者はわずかであり、殆どの者は機械の操作員として働いている。編集、音響と効果挿入はプロデューサーがしなければならないため、ポストプロダクションもプロデューサーがしなければならない。(98番組制作)
- ・番組制作のための才能の欠除、児童番組のためのセットやドロップに関するよいアイデアの不足、番組制作スタッフに最先端技術を使うような動機づけの困難。(91社会教育番組Ⅱ)
- ・NHKの番組制作システムはSLRCのものと違っていた事。(96社会教育番組Ⅱ)

IV. 日本以外の国での研修について

1. 貴方は日本以外の他の援助国や国際機関による類似の当該分野関連研修に参加した事がありますか。

はい (3人)

いいえ (7人)

研修年度：

- ・ 1998年 (91番組制作)
- ・ 1993年 (93社会教育番組II)
- ・ 1992年 (96社会教育番組II)

研修期間：

- ・ 23日間
- ・ 12日間
- ・ 21日間

研修名：

- ・ 家族計画
- ・ 児童番組のワークショップ
- ・ 環境テレビ番組

研修目標：

- ・ 家族計画に関する情報、コミュニケーション、教育の向上
- ・ 児童番組の重要性の理解
- ・ 環境についての事柄に我々の技術を活用させる

研修地：

国名：

- ・ インドネシア
- ・ バングラデッシュ
- ・ マレーシア

都市名：

- ・ ジャカルタ
- ・ ダッカ
- ・ クアラルンプール

研修計画協力機関：

- ・ JICA
- ・ アジア太平洋放送研究組合 (AIBD)
- ・ AIBD

2. 他の援助国での研修と比べて、日本での研修を改善するための提案やコメントがありますか。

- ・いいえ
- ・バングラデッシュでの研修が本研修参加前に唯一参加した事がある研修だったので、本研修は個人的に、素晴らしいコースだと感じた。
(’93社会教育番組Ⅱ)
- ・いいえ
- ・いいえ
- ・いいえ
- ・いいえ
- ・本研修以外には他の国で研修を受けた事は無いが、本研修コースは良いと思う。(’93番組制作)

V. その他

テレビ番組制作分野に関する研修コースや、その他技術協力に対する日本への要望がありましたら、以下に述べて下さい。

(例：G.I.表記方法、帰国研修員のアフターケア、同窓会等。)

- ・テレビ番組制作分野の上級コースに参加したい。
- ・研修員の応募資格の35歳という年齢制限は改定されるべき。
(’91番組制作)
- ・帰国研修員がより多くの番組制作知識を広げ、日本の人々との交流をするために、もっと多くの研修の機会を与えてほしい。(’95番組制作)

3. 帰国研修員 - 集計 5名分 - <パキスタン>

I. 職歴と業務内容について

1. 帰国後の職務を述べて下さい。
(現職については、添付資料2.「帰国研修員リスト(定着状況)」参照)

II. 研修コースの評価について

1. コース概要に記された到達目標と目的は貴方の要望を満たしていますか。
はい(6人) いいえ(人)

しかし研修期間のわりには研修範囲はもっと広く望まれるところだった。
(97番組制作)

2. 貴方の要望を満たすために上記の到達目標と目的を変更する必要はありますか。

はい(3人) いいえ(3人)

- ・我々は主に70%以上の人口が農業者のため、その解説・情報を望んでおり、我々は農業者のためのドキュメンタリー番組の制作を多くしているの
で、ドキュメンタリー番組に関するより多くの情報と実習を望む。
- ・より良い番組制作のための指導や方法についての討論の場を設けること。
(92社会教育番組II)
- ・研修目的の達成の為に、例えば幻想的な視覚的効果のための コンピューターグラフィックス等の様々な機材を使った高度な実習を取り入れる必要がある。(95社会教育番組II)

3. 研修コースは貴方の期待または目的を満たしましたか。

1) 講義

はい(6人) いいえ(人)

- ・講義はテレビ番組制作において重要な部分の全てをカバーしていた。
(91番組制作)
- ・講義は情報豊富で刺激があった。(97番組制作)
- ・オリエンテーションから実施研修まですべて刺激をうけた。
(97社会教育番組II)
- ・すべての講義は分かりやすく研修科目に関連していた。
(92社会教育番組II)
- ・有益で意義深いものであった。(93社会教育番組II)
- ・講義の幾つかはテレビ制作の基本技術以上の高度なものを満たした。
(95社会教育番組II)

2) 実習

はい (5人)

いいえ (1人)

- ・実習は期待を満たしてくれた。(91番組制作)
- ・実習では十分に理論が活かされず、納得のいく番組制作ではなかった。(97番組制作)
- ・ドキュメンタリー番組の制作中、「K. J. メソッド」と「構成システム」は有効だった。(97社会教育番組II)
- ・より多くの実習が必要である。(92社会教育番組II)
- ・制作の視点がよく組み込まれていた。(93社会教育番組II)

3) 見学

はい (6人)

いいえ (人)

- ・様々な番組の視察後の分析は議論や評価の深さに欠けていた。また、研修員がダブルコピーできないのはよくない。それができればより良い視察のために極めて有効だっただろう。(97番組制作)
- ・様々な都市や機関を訪ねる事は研修員に良い影響を与えた。(91番組制作)
- ・NHKをはじめとする日本のマスメディアにたずさわる人々がどの様に教育や教育番組に貢献しているか知ることは意義深かった。この点で研修コースは非常に刺激的だった。(97社会教育番組II)
- ・全体的に研修事項に応じたものを期間内に取得できた。(92社会教育番組II)

4. 今後、研修コースの中でどのような内容がより強調されるべき、あるいは新しく紹介されるべきでしょうか。

- ・コンピューターグラフィックス、鮮明度の高いテレビ(91番組制作)
- ・一般番組コースの代わりにドラマ、音楽、教育等の特別コースがあればより有効だろう。(97番組制作)
- ・ドキュメンタリー番組の制作法、討論会、新旧テクノロジーの交換。(92社会教育番組II)
- ・一般番組の研修の他に音楽番組、児童番組、アニメーション、ドラマ番組なども又あるべきである。(93社会教育番組II)
- ・スポーツイベントレポートの最新技術、コンピューターグラフィックス使用法、スポーツ分野での複数カメラ使用のモダンなアプローチ。(95社会教育番組II)

5. 研修コースについて貴方が日本に要望、期待する事があれば述べて下さい。
(例：目標、期間、研修内容について等。)

- ・研修員は各国の文化に基づいた情報を収集し、1つ問題を決めて普遍的共通要因をもった、“The Roots”というタイトルの25分番組の計画を立てるのがよい。(97番組制作)
- ・一般コースの他に、ドラマ、スポーツ、ニュース番組の専門コースもあれば有益だろう。(91番組制作)
- ・集団研修は良い面もあれば悪い面もある。集団研修で全体の事柄のそれぞれの状況を共有する事はもちろん有益であるが、同時に創造的な分野ではしばしば個人の本来の持ち味を表現することに限界があり、個性をつぶしかねない。とはいえ集団コースには集団の良さがあるので皆でシェアするのがよい。また(見方は個人それぞれに違うので、もっと個人に焦点をあてて情報源のマネージメントをすべく)個別研修があってもよい。第三国のコミュニケーションのあり方として我々は最も適切で有効な情報源の使用法を知るべきであり、日本の経験は最も良い例である。(97社会教育番組II)
- ・食糧の安全はすべての国で必然である。将来の研修コースには情報を最大に引き出すそれに関連した番組制作の方法とドキュメンタリーならびに討論番組の制作についての紹介がほしい。(92社会教育番組II)
- ・上記に同じ。(93社会教育番組II)
- ・研修コースは研修員のレベル毎に基本コース、上級コースと設定されるべきである。研修員はそれぞれの専門と実力にあった同じ目的・目標のコースに振り分けられるべきで、同じコースに振り分けられるべきではない。
- ・上級コースでは、研修期間を延長し、様々な特殊技術を学ばせるべき。
- ・研修目標にはマルチメディア的アプローチと有効利用を学ぶことを組み込んでほしい。(95社会教育番組II)

III. 研修コース内容の適用について

1. 帰国後、研修コース(講義、実習、見学等)で経験し、得たことを貴方の職務で適用しましたか。

はい(6人)

いいえ(人)

例えば編集機に備え付けられているタイムコードについてはまだ適用していない。(95社会教育番組II)

1) 研修コースで得たどのような知識や技術を職務に適用しましたか。

・テレビ番組制作のための様々な手順のすべてはNHK-C T Iで得ることができ、それらを自分の制作するすべての番組にうまく適用した。(91番組制作)

- ・番組制作全般（'97番組制作）
- ・「K. J. メソッド」は私にとって新しい経験であった。我々の現場では時間がかかるが、首尾が一貫した番組を制作するのにとても役立っている。番組構成の方法もメッセージのイメージ作成にとても役立っている。
（'97社会教育番組II）
- ・番組制作のための計画の立て方、社会問題に関するビデオ制作の方法、編集方法。（'92社会教育番組II）
- ・私はPTV2で2年以上働いており、直接／間接的な教育に基づいたドキュメンタリー、ステージショー、ドラマ番組を制作した。
（'93社会教育番組II）
- ・実際の制作の前の紙の上での番組計画、編集前の撮影計画とショット一覧。しかし我々の多くの技術は研修を受ける前にも適用されていた。
（'95社会教育番組II）

2) 上記で述べた知識や技術の貴方の職務での適用の仕方を述べて下さい。

- ・知識と技術を適用するのに日本で得た番組編集は最も重要。（'91番組制作）
- ・日本で得た番組制作において効果的な事を実際に取り入れている。
（'97番組制作）
- ・パキスタンで我々は通常、番組制作に関わる事を書き出す代わりに我々自身の記憶に頼っている。「K. J. メソッド」と構成法は紙とペンに属しているので、我々のシステムに適用するのは少々難しいのだが、私自身は個人的に適用して満足している。機関内でこのシステムを他のプロデューサーと共有した。日本で使った「K. J. メソッド」つまり黄色ふせん紙の方法は私は今もパキスタンで使っている。（'97社会教育番組II）
- ・パキスタンでは70%以上が農業共同体であり、社会問題を抱えている。そのような社会問題に関する番組制作に自身のベストを尽して取り組んでいる。
（'92社会教育番組II）
- ・番組制作前はその内容についての最大限の知識を得、制作後はあらかじめ予定された簡潔な編集を行うよう努力している。（'93社会教育番組II）
- ・番組制作に対するシステム化されたアプローチ法の使用を始めた。番組制作のアプローチの中で制作前の計画は絶対必要なものになった。例えば社会教育は多角的な視点で見られる必要がある。内容に対して1つの特別なアプローチでは教育情報を限定してしまう。このような仮説的な考え方の教育は我々の第一の問題の1つである。（'95社会教育番組II）

2. 貴方の職務に適用するのに最も有効な研修内容は何ですか。

- ・屋外撮影、編集、ミキシング、台本制作と番組評価法は研修プログラムのなかで最も有効な研修事項だった。（'91番組制作）

- ・番組台本制作（'97番組制作）
- ・安間氏のドキュメンタリー番組制作に関する講義は大変良かった。
- ・音声ミキシングはパキスタンのものとは全く異なっていた。これもまたパキスタンでは記憶に頼っているが、日本では紙とペンに基づいていた。
- ・構成方法と「K. J. メソッド」。（'97社会教育番組II）
- ・農業に関するドキュメンタリー番組や、討論番組。（'92社会教育番組II）
- ・最も有益だったことは、実際の録画前に計画する事、番組に対する理解と編集前の準備である。（'93社会教育番組II）
- ・見学、番組研究、映像編集の分類、番組制作技術。（'95社会教育番組II）

3. 貴方の職務に適用するのに有効でない研修内容がありますか。

はい（ 人）

いいえ（6人）

最先端の制作技術や異なる分野の制作を知ることができたので、コンピュータグラフィックスやアニメーション等の研修コースの全ての内容はとても有益である。

4. 貴方の職務で、研修コースで得た知識や技術を適用するにあたっての問題点に関する以下の質問にお答え下さい。

1) 研修成果の適用にあたって上司は理解や協力をしましたか。

はい（6人）

いいえ（ 人）

2) 研修成果を適用するために十分な資機材を供給されましたか。

はい（3人）

いいえ（3人）

3) 研修成果を適用するために十分な人材を供給されましたか。

はい（4人）

いいえ（2人）

4) 研修成果適用にあたって何か問題があれば述べて下さい。

- ・資機材が古いこと。（'97番組制作）
- ・BETACOMデジタル機材等の新しい技術が必要。（'92社会教育番組II）
- ・コンピュータグラフィックスとアニメーション以外には特に問題は無い。（'93社会教育番組II）

IV. 日本以外の国での研修について

1. 貴方は日本以外の他の援助国や国際機関による類似の当該分野関連研修に参加した事がありますか。

はい (人)

いいえ (6人)

研修年度：

研修期間： 年 月 日

研修名：

研修目標：

研修地：

国名

都市名

研修計画協力機関：

2. 他の援助国での研修と比べて、日本での研修を改善するための提案やコメントがありますか。

- ・限られた研修しか提供されなかったので、研修日数が十分ではないのと思う。この種の研修は新しく配属されたプロデューサーに向いていると思う。(93社会教育番組II)

V. その他

テレビ番組制作分野に関する研修コースや、その他技術協力に対する日本への要望がありましたら、以下に述べて下さい。

(例：G.I.表記方法、帰国研修員のアフターケア、同窓会等。)

- ・セミナーやセッションについての頻繁な情報交換を行う。
- ・JICAから供給されるテレビ番組制作の資料が十分でない。(97番組制作)

JICA